

國性爺合戰

作者 近松門左衛門

花飛云々一三昧
時の句に於て樂
しき春は過去つ
ても禁中は數多
の妾を置きて榮
華を盡すと成り

三夫人云々一夫
人は本妻他は女
官

二月中旬一唐王
建の句にて六月
ならでば懸せぬ
瓜を二月に出す
榮耀

越羅云々一越國
のうす物蜀江錦

序詞 花飛び蝶駭け共人愁へず 水殿雲廊別に春を置 曉日粧ひなす千騎の女、紅唇翠黛色
を交へ、土も蘭麝の梅が香や、桃も櫻も長へに、花を見せたる南京の、時代ぞ盛り盛ん
なる。抑 大明十七代思宗烈皇帝と申奉るは、光宗皇帝第二の皇子、代々の讓の糸筋も、
絶へず亂れぬ青柳と、靡き従ふ四方の國、寶を積んで貢物、歌舞遊宴に長じ給ひ、玉樓
金殿の中には、三夫人、九嬪、廿七人の世婦、八十一人の女御有。凡三千の容色、顔を悦ば
しめ、群臣諸侯媚を求め、珍物奇觀の獻物、二月中旬に瓜を獻する榮華なり 爰に三千
第一の御寵愛華清夫人、去年の秋より懷妊有て、此月御産の當月、君の歡感、臣下の悦
び、聖壽四十に及び給へ共、世繼の太子在さず。豫て天地の御祈り此度に印有、王子
誕生疑ひなしと、産殿に名珠美玉を列ね、産衣に越羅蜀錦を裁ち、御産今やと用意有。

阿監一女中頭
中呂一四月

火浣布一火鼠の
毛織布
馬肝石一馬の肝
に似た石（以上
難波土産）

髻鬘一仲替き
事、左傳の語
卿相雲客一公卿
（三位以上）殿上
人四位）

中にも大司馬將軍吳三桂が妻柳歌君、此比初子を平産し、殊に男子の乳なれば、御乳
 付の役人、其外乳母侍女阿監、役々の官女附添て、掌の上の珊瑚の珠とぞ嘉祝ける。
 時に崇禎十七年中呂上旬、鞞鞞國の主順治大王より使を以て、虎の皮豹の皮、南海の
 火浣布、到支國の馬肝石、其外邊國島々の寶、庭上に竝べさせ、使者梅勒王謹んで、「鞞
 鞞國と大明國、古より威を勵み、國を争ひ軍兵を動し、鋒先を交へ、互に仇を結ぶ事、
 且は隣國の好にたがひ、且は民の煩ひたり。我鞞鞞は大國にて、七珍萬寶くらからずと
 申せ共、女の形余國に劣つて候。此大明の帝には華清夫人とて、隠れなき美人おはする
 由、我大王戀焦れ、深く所望に候へば、此方へ送り給はつて、大王の后と仰ぎ、大明鞞
 鞞向後親子の因をなし、長く和睦致さんと、形の如くの御調物、數ならぬ共鎮護大將梅
 勒王、后御迎の爲參朝」とこそ奏しけれ。帝を始、卿相雲客、今に始めぬ鞞鞞の難題、
 すは諍亂の基ぞと、宸襟安からざる處に、第一の臣下右軍將李蹈天進み出、今迄は國の
 恥辱をつとしみ隠し置候。去ル辛の巳の年、北京五穀實らず、萬民饑渴に及びし刻、某
 密かに鞞鞞を頼み、米粟數百萬石の合力を請、國民を救ひ候き。其返報に、何事にて
 も鞞鞞の望、一度は必協へんと堅く契約仕る。君今四海を保ち、民を治め給ふも、一

奏問—奏聞

三皇—伏羲神農
帝帝—少昊より
舜迄
五倫—君臣父子
夫婦兄弟朋友
飽食—食ひ—孟子
の飽食暖衣をと
れり

管仲云々—管仲
が諸侯を聚めて
威伏せし事（史
記）

度韃靼の情によつてなり。恩を知ねは鬼畜に同じ。御名残はさる事なれ共、疾々后を送られ然るべし」とぞ奏問す。大司馬將軍吳三桂たいろう殿にて篤と聞、御階欄干踏散し、李蹈天が膝元にどうと座し、異不便や御邊は何時の間に、畜生の奴とは成たるぞ。忝も大明國は、三皇五帝禮樂を興し、孔孟教を垂れ給ひ、五常五倫の道今に盛なり。天竺には佛因果を説て斷惡修善の道有、日本には正直中常の神明の道有、韃靼國には道もなく法もなく、飽迄に食ひ暖に著て、猛き者は上に立、弱き者は下に付、善人悪人智者愚者の別ちもなく、畜類同前の北狄、俗呼んで畜生國といふ。如何に御邊が頼む邊、數百萬石の米穀を合力して、此國を救ひしとは不審しく。民勞れ饋に及ぶは何故でか。上によしなき奢を勧め、宴樂に寶を費し、民百姓を貴はたり、己が榮華を事とする、其費を歇めたれば、五年や十年民を養ふに事を缺かぬ大國の徳。叡慮も計らず、公卿僉義にも及ず、懷妊の后を輕々しく、夷狄の手へ渡さんといふ心底聊か心得ず。契約は御邊との相對、上に知し召さぬ事。畜生國の貢物、内裏の汚れ取て捨よ、官人共」と、北狄を事共せず、國の威光を見せたるは、管仲が九度、諸侯の會も斯やらん。韃靼の使梅勒王大きに怒つて、「ヤア—大國小國は兎もあれ、合力を得て民を養ひし恩も知らず、契約

を變ずるは、此大明こそ道もなき法もなき、手に足らぬ畜生國。軍兵を以て押寄せ、帝も后も一くるめ、我大王の履持にする事、日を數へて待べし」と、席を蹴立立歸る。李蹈天引留め、「暫くく、憤り尤至極せり。某先年貴國の合力を受て一粒も身の爲にせず、國を助けしは忠臣の道成に、今又約を變じ兵亂を招き、君を苦しめ民を惱し、剩恩を知らぬ畜生國といはせんは、御代の恥國の恥、此度臣が身を捨て、君を安んじ、國の恥を淨むる忠臣の仕業、是見給へ」と、小劔逆手に拔持、弓手の眼にぐつとつき立、眼蓋を懸てくるりくと繰出し、朱に成たる睛引摺んで、孝なふ御使者、兩眼は一身の日月、左の眼は陽に屬して日輪なり。片目なければ不具者、一眼を扶て韃靼王に奉る。國の恩を報ずる、道を重んじ義を守る、大明の帝の忠臣のふるまひ是候」と、笏にすへて差出せば、梅勒王押戴き、「ア、通れ忠節や候。只今吳三桂の言分にては、否共兩國權を争ひ、合戦に及ぶ處、天下の爲に身を捨て、事を治め給ふ事神妙々々。忠臣共賢臣共申にも餘り有。后を迎へ取たるも同前。我大王の歡感、使に立たる某も、面目是に過べからず。早御暇」とぞ奏しける。叡慮殊に麗しく、帝、李蹈天が眼を抉りしは伍子胥が余風、吳三桂が遠き慮りは范蠡が趣あり。兩臣政事を糺我國は、千代万代も變る

伍子胥一人吳王を謀めて眼を東門にかく（東周列國史）

月の都云々、
燐灼姫の故事を
とれり、
竹取物語
男女の中云々
歌は男女の中を
和ぐと古今集
の序に出づ

萬葉一語記に天
子は萬葉の國と
ありて軍車萬葉
を出す故云

まじ。韃靼の使は早本國に返すべし」と、宴樂殿に入給ふ。實に佞臣と忠臣の面は似たる紛れ者。目利を知らぬ南京の君が榮華ぞ三皿例なき。爰に帝の御妹梅檀皇女と申せしは、まだ御年も十六夜の、月の都の宮人の、胤や此世に降る露の、玉をのべたる御形、管絃の道文の道、文字も働く口吟み、日本で歌といふけなが、男女を和ぐとや。爰にも戀の中立は、變らぬものと詩を吟じ、年より古し御心、兄弟の奢の様、色に耽り酒宴に誇り、朝政し給はぬ、御異見の種にもと、行義正しき御身持、伽の女官召寄て、浮世咄も呷きの、耳は戀する眼は睨む、心が伽羅の燒さしの、思ひ埋てあかざるよ。長生殿の方より、「出御成」と呼はつて、廿限りの后達二百人、梅と櫻の造枝、百人づつ片わけて振かたけ、左右に召具し入給ひ、帝なふ妹君、我萬乘の位に即き、臣下多き其中に、右軍將李滔天は遂に朕が命に背かず、明暮心を慰むる第一の忠臣、御身に心を懸ると聞幸ひ朕が妹輩にせんと思へ共、御身更に承引なく、今日迄は打過たり。然るに此度韃靼國より、無寐の難義を云かけ、既に合戦に及び、國の亂と成べき處、吳三桂などが忠臣顔、口先の道理は誰もいふ事、李滔天が左の眼を抉て宥めしゆへ、使も伏して歸つたり。國の爲君の爲、身を捨て不具と成、末代無双の忠臣賞せずんば有べかなず。是非に朕が

風流陣一昔玄宗
揚貴妃と宴する
時女官をして旗
を持たせて職は
せたる故事
雅が袖云々梅
花の散る形容
鶯は櫻もてる女
官にたとふ

地温く云々花
軍の兵法にて風
は伏兵、蒼は刀
花を開くは功
名、楳は新手の
兵に皆響へたり
二月の雪一花軍
の形容、朗詠に
折梅花而挿頭
二月雪落衣

妹聾、北京の都を譲らんと約せしが、御身承引有まじと、此花軍を催せり。賢女立して
すんくと、素氣なき御身が心を表し、梅花を味方に参らする。朕が味方は櫻花、女官
共に戦はせ、櫻が散て梅が勝たば、御身の心に任すべし。櫻が勝て梅花が散らば、御身
の負に極つて李滔天が妻となす。天道次第縁次第、勝も負るも風流陣。懸れや懸れ」と
宣旨有。下知に従ふ梅櫻、左右に分つて備へける。勅詔なれば姫宮も、よし力なしさな
がら、心に染まぬ妻定め、左右なう引べき様はなし。花も我身も魁がけて、當今の妹栴
檀皇女、縁の分目の晴れ軍、「大將軍は我なり」と、名乗もあへぬかざしの梅、誰が袖觸
れし梢には、群居る鶯の翼にかけ、散らす羽音も斯やと梅が香も、芬々と打亂れ、受
つ流しつ戦ふたり。姫君下知しての給はく、「柳渦く木蔭には、風有と知るべし。弱き
枝には蒼をもたせ、強きに花を開かせよ。うつろふ枝を楳にかへて、互に力を合すべし」と、
花に慣れたる下知によつて、喚いて懸れば花を踏で、同じく惜しむ色も有。唯一文
字に頭に挿せば、二月の雪と散るも有。落花狼藉入亂れ、軍は花をぞ三重散しける。豫
て帝の仰によつて、心を合せし女官達、梅力態と打負て、枝も花も折亂され、むらく
ばつと引ければ、勝色見せて櫻花、「サア姫宮と李滔天御縁組は極つたり」と、數多の女

頻伽—迦隣頻伽
とて極樂に居る
鳥

一家仁あれば云
云—一家は君家
一人は天子(大
學)

時の聲—関の聲

官同音に勝時揚る頻伽の聲、宮中響き渡りしは、千羽鷺百千鳥、囀りかはす如くなり。司馬將軍吳三桂、鎧兜さはやかに出立て、偃月の戟會釋もなく振廻し、梅も櫻も散々に雍散し、御前に畏、吳只今玉座の邊に合戦有とて、時の聲殿中に響き、宮中以の外の騒によつて、物の具固め馳參じ候へば、扱馬鹿らしや、御妹栴檀女と、李蹈天が縁定の花戦とは、天地開けて此かた、斯るたわけた例を聞ず。君知しめさずや、一家仁あれば一國仁を興し、一人貪戾なれば一國亂を起すといへり。上の好む處に従ふは民のならひ。此事を聞及び、山樵土民の嫁取掣取、爰にても花軍彼處にても花軍、喧嘩鬪諍の端と成、花は散て打物業、誠の軍起らん事、鏡にかけて見るごとし。只今にも逆臣起り、宮中に攻入喚き叫ぶ時の聲は聞ゆる共、すは例の花軍と、馳參る勢もなく、玉躰を暗々と逆臣の刃にかけん事、勿躰なし共淺まし共、悔むに甲斐の有べきか。其逆臣佞臣とは李蹈天が事。君は忘れ給ひしか、御若年の時鄭芝龍と申者、佞臣を斥け給へ、と諫め申を鱗逆有、鄭芝龍は追放たれ、今老一官と名を變へ、日本肥前の國、平戸とかやにすまい致と承る。鄭芝龍が傳へ聞、日本迄大明國の御恥辱ならずや。先年大明飢饉の時、李蹈天が邪智を以て、諸國の御藏の米を竊み、君に憐みなきゆへに、おのれ韃靼の合力を受、

五刑一盡劇^キ、
大辟、刑
拳を以て云々
外るゝ事なき聲

白雪却て黒し
物は見やうによ
るといふ禪宗の
法語

金刀點一^キ大字は
三點よりなる、
一は玉案ノは犀
角、へは金刀點
(難波土産)

民を救ふといひなし、國中に散し與へ、萬民をなつけ、謀反の臍を堅めし、と知召されぬ愚さよ。彼が左の眼を刺りしは、是ぞ韃靼一味の相圖。御覽候へ南陽國にして日の國なら明らかなりといふ字訓にて、月日をならべ書たる文字。此大明は南陽國にして日の國なり。韃靼は北陰國にして月の國。陽に屬して日に譬へし左の眼をくつたるは、此大明の日の國を、韃靼の手に入ん一味の印。使も敏く其理を悟悦んで立歸る。積惡奸曲の佞臣、早く五刑の罪に沈めずんば、聖人出世の此國忽蒙古の域に陥ち、尾を振り皮を被らぬ計畜類の奴と成、天地の怒り宗廟の神崇りをなし、其罪帝の一身に歸せん事、拳を以て大地を打には外るゝ共、吳三桂が此詞は違ふまじ。恨めしの敷慮や」と、泣つ怒つつ理を盡し、詞を盡して奏しける。帝大きに逆鱗有、物識顔成文字の講釋、理を付ていふならば白雪却て黒し共いふ義有、皆李蹈天を嫉みの詞。事もなきに甲冑を帶し、朕に近寄る汝こそ逆臣よ」と、立懸つて御足にかけ、吳三桂が眞向を踏付給へば、不思議やな、御殿頻に鳴動して、勅筆の額搖ぎ出、大の字の金刀點、明の字の日偏、微塵に碎け散たるは、天の告かと畏ろしし。吳三桂猶身を惜まず、「エ、情なや、御眼も暗みしか、御耳も聾たるか。大の字の形は一人と書たる筆畫、一人とは天子帝の御事。其一人の一點取れば、帝の御身は半身

炊水—米をとぎ
たる白水

あり合ふ—力を
合せる
みづ子—赤子、
みづは弱き意

明の字に偏なければ日の光なき國は常闇 忝も彼の額は、御先祖大祖高皇帝、御子孫繁昌御代萬歳と宸翰を染め給ふ。宗廟の神の御怒り畏しと思召、道を正し非を改御代を保ちましまさば、君に擲つ吳三桂が一命、踏殺され蹴殺されても厭はざこそ。土共なれ灰共なれ、忠臣の道は違へじ」と、御衣に縋り大聲上、涙を流し諫めしは、代々の鏡と聞えける。斯る處に四方八面人馬の音、貝鉦鳴し太鼓を打、時の聲地を動かす、天も傾ぶく計なり。思ひ設けし吳三桂、高殿に駈上り、見渡せば山も里も韃靼勢、旗を靡かし弓鐵炮、内裏を取巻攻寄せしは、潮の満來る如くなり。寄手の大將梅勒王、庭上に乗入大音上「抑我國の主順治大王、此國の後華清夫人に戀慕とは謀略、懷妊の后を召取、大明の帝の胤を絶さん爲。李蹈天が眼を刺て一味の印を見せたる故、時を移さず押寄たり。とても叶はぬ吳三桂、帝も后も擲取て味方に降り、韃靼王の臺處に匍匐い、炊水でも啜つて命を續け」とぞ呼はりける。吳、ヤア事おかし。百八十年草木も揺がぬ明朝を、攻破らんなんどとは、大海に横はる鯨を蟻の狙ふに異らず。彼れ追拂へくと、駈廻つて下知すれ共、我手勢百騎計の徒士武者ならで、公家にも武家にも誰有て、おり合ふ味方のあらざれば、拳を握て立たる處に、女房柳歌君水子を肌抱きながら、后の御手を引立、

倭訓琴

た
もことーそな
大手云々表門
の賊に當らん

し
あん廻しー追廻
餘さじー残ちず
討取れ

刃の錆は云々ー
汝に出づるもの
は汝にかへると
いふに同じ。之
は翁の成語と難
波土産に云へり

柳くわしなふ口惜ごうんや御運すゑの末。公卿大臣くまやうだいじんを始雜人下郎はじざふかにんげうに至る迄。李蹈天りたうてんに一味いちして御味方おみかたは我

我計わがけい。無念至極むねんしごくと切齒きさきをなす。異いア、悔くやむなくいふて益えきなし。但后たゞしきさまの胎内たいないに帝みかどの

胤たねを宿やまし給へば大事だいじの御身おみみ。一方いっぽうを切抜きりぬけて君諸共きみもろともに、某御供申それがしおんごもべし。其子こも爰こゝに捨置すておき

おことは一先御妹ひとまづおんいもを介抱かいほうし、海道かいどうの港みなとを指さして落おちよく」といひければ、柳くわし心得こころえたり」

とかひく敷しく、柎檀皇女せんだんくわうにょの御手おみてを引ひき、金川門きんせんもんの細道ほそみちを、二人ふたり忍しのびて落給おちふ。異いいで是か

らは大手おほての敵てきを、一當ひとあてあてて追散おひちらし、安々やすく落し奉まもらん。御座ござを去いらせ給ふな」と、いひ

捨すてて駈出かけいで、「明朝みんてう第一だいいちの臣下しんげ、大司馬將軍だいしまたしやうじん吳三桂ごさんけい」と名乗なをりかけ、百騎ひやくきに足たりらぬ手勢てせいにて、

數百萬騎すひやくまんきの蒙古もんこの軍兵ぐんべい、割立わりたておん廻まはし、無二無三むにむさんに切入きりいれば、韃靼たたん勢せいも「餘あまさじ」と、

鐵炮てつぱう、石火矢隙いしひやすきま間なく、矢玉しやよくを飛とばせて三軍さんぐん戰いくさひける。其隙そのひまに李蹈天弟りたうてんてい李海方りかいほう、玉躰ぎよくたい近

く亂みだれ入いり、帝みかどの御手おみてを兩方りやうほうより掟しつかと取とり。后ご夢共辨むともわかへず、后ご天罰てんばつ知らずの大惡人だいあくじん、御恩ごおん

も冥加みやがも忘れわすれしか」と、縋すがり給へば、李りヲ、おのれとても助けぬ」と、取とつて突退つきのけ、氷

の利刃りけんを御胸おんむねに差當さしかつる。君きみは怒いかれる龍眼りやうがんに御涙おんなみだをかけながら。帝みかど實ひに刃やいばの錆さびは刃やいばより出

て刃やいばを腐くさらし、檜山ひのさやまの火ひは檜ひのきより出いでて檜ひのきを燒やく。仇あにも情なさけも我身わがみより出いづるとは、今いまこそ思おもひ

知られたれ。鄭芝龍ていしせん、吳三桂ごさんけいが諫いさめを用もちひ。己等おのれらが詔みことばに誑たぶらかされ、國くにを失うしなひ身を失うし

水もたまらず一瀉して過ぎ行く意の俚諺

齊一李滔天を討つに譬へ非時は李海方に譬ふ

さしつたり一合點と

なひ、末代に名を流す。口に甘き食物は、腹中に入れて害をなす、と知らざりし我恐さよ。汝等も知る如く、夫人が胎内に、十月に當る我子有、誕生も程有まじ。月日の光を見せよかし。せめての情」と計にて、御涙にぞくれ給ふ。李ア、成らぬく、大事の眼を刺出したるは何の爲。忠節でも義理でもない。君に心をゆるさせ、韃靼と一味せん爲。晴一つが知行に成、君の首が國に成」と、取て引寄せ御首を、水もたまらず打落し、李サア李海方此首は韃靼王へ贈るべし。汝は后を搦め來れ」といひ捨て、寄手の陣へぞ駈入ける。司馬將軍吳三桂、敵數多討取、難なく一方切開き、君を落し奉らん、と立歸れば南無三寶、御首もなき尊骸朱に成て臥給ひ、李海方后を搦め引立てる。吳ヤア味ひ處へ出合ふたな。我君の弔ひ軍、齋にこそ外れたれ、非時を喰ふ」と飛懸り、李海方が眞向、二ツにサツと切割て、后の縛め切ほどき、涙ながらに尊骸を押直せば、代々に傳はる御國譲り、御即位の印の印綬、御肌に懸けられたり。「エ、有難し。是さへあれば、御誕生の若宮、御位心安し」と、鏝の肌を押入、「一先后を御供せうか。先御骸を隠そうか」と、難義は二つ身は一つ、打碎かんと敵の勢、一度にどつと亂れ入。吳「さしつたり」と切拂ひ、込入ればなぐり立て、打伏せ難伏せ捲り立、走り歸つて「今

木まぶりー木守

渚—なかくにかく

札よき—鎧の板
●丈夫な事

は是迄事急なり。御死骸は兎も角も、一大事は御世繼」と、後の手を引立出れば、此比生れし我水子、乳房を慕ひわつと泣。異エ、邪魔らしい、去ながら己も我が世繼ぞ」と引寄て、戟の柄にしつかと結付、「こりや父が討死するならば、成人して若宮に、忠臣の根繼となれ。我等が家の木まぶり」と、振擔てぞ三重落人を、切留めんと敵の兵、慕ひ寄れば踏留り、切捨打捨引汐の、海道の港に著にける。是よりたいす府へ渡らんと、見れ共折節船一艘も、渚に沿ふて立たる所に、四方の山々森の蔭、打かくる鐵炮は、横ぎる雨の如くなり。吳三桂は札よき鎧、飛來る玉をうけとめく、后を覆ひかこへ共、運の極めや胸板に發矢と當り、玉の緒も斷れて敢なく成給ふ。吳三桂もはつと計前後に暮れて立たりしが、「御母后は是非もなし。十善の御子胤を胎内にて、暗々と泡となさんも云ひ甲斐なし」とて、劔拔持て后の肌押寛け、脇腹に押當、十文字に割き破れば、血潮の中の初聲は、玉の様成男子親王、嬉しも嬉し悲しも悲し、遣る方涙に母后の、袖引ちぎり押包み、抱き上しが、「待て暫し、取巻たる四方の敵、死骸を見付、若宮を匿し取たりと行末迄探されては宮を育てん様もなし」と、とつくと思案し、我子引寄せ衣裳を剥ぎ、宮に打掛けまるらせ、劔取直し、水子の胸先指通しく、後の腹に押入、「あつばれ己は果

浮名殘—憂名殘

仕留たは—射殺した上

人前廢つた—忠臣の名が廢つた

がむしや—猪武者

渡りに船—都合よき諺

報者、よい時生れ合せて、十善天子の御身代り、出来しおつた出来いた、娑婆の親に心残すな。親も心は残らぬぞ」と、いへ共残る浮名殘、鎧の袖に若宮を包む涙に咽返り、別れ行くこそ哀なれ。斯とは知らず柳歌君、栴檀女を誘ひ、港口迄落延しが、前後に敵満々たり。柳サア是迄ぞ遁るよだけ」と、繁る蘆間を掻分て、身を忍びてぞ隠れ居る。李蹈天が侍、大將安大人、手勢引具しどつと駈寄せ、安「今の鐵炮、たしかに后か吳三桂に當」と覺へし」と、四邊を見廻し、安「コリヤ見よ、后を仕留たは。ハア腹を切割き、懷妊の王子迄殺した。忠節立する吳三桂、主君を捨て、名を捨てても命惜いか。彼奴は人前廢つた。此上は彼が妻の柳歌君、栴檀女を尋る計。眼を配れ高名せよ」と、四方に別れ走り行。中にも剛鞭といふがむしや者、「いで栴檀女を召取、一人の手柄にせん」と、鎧の上に囊打かけ、海士の小舟に棹して、入江々々を漕廻り、「此蘆の蔭が氣遣ひな」と、押分る權の先、柳歌君しつかと取、力に任せ跳返せば、舟端を踏外し、俯伏にかつばと沈み、浮上らんとする所を、權も折よと疊みかけ、打ば沈み浮めば打、息もつがせず泥龜の、泥を泳ぐが如くにて、水底潛り落失せけり。柳「エ、無用の抜かけ、殊に舟迄仰付られた。渡りに舟とは此事」と、船中にかくし置たる銀取て横へ、栴檀女を乗せ參らせ、我も乗らんと

雷光石火一果敢
なき事にかく

踏ためず一ふみ
ととめず

よるぼひ一ひよ
るくして

せし處に、何處より這ひ上りけん、剛韃鎧も濡柴、戟提けて廿騎計、餘すまじと追懸る。
 河ハア忙がしや御覽候へ。敵手ひどく追懸れば、暫し防ぐ其間、船底に隠れまませ」と、
 拾ひし劔と腰の劔、二刀に振て待かけたり。剛韃程なく駈付「憎い女め權で打た返報」と、
 長柄の戟押取延て突かくる。柳ヲ、其方から當がふた此劔。此方からも返報」と、切て廻
 れば廿余人、女一人に切立られ、陸にまでへる蘆邊の鷗、一羽もたよす討るも有、痛手を
 受て逃るも有。柳歌君も剛韃も、數箇所の深手朱に成、一村蘆を押分々々、追入追込、互の
 眼に血は入たり、前後も分ぬ瞽打、岸の岩角切先に雷光石火の命を限り、危かりける
 三重 有様なり。剛韃戟も切折られ、膝行寄てむんずと組、柳歌君が持たる劔、もぎ取らん
 くくと捻合ふ足を踏ためず、仰様にかつぱと伏す。直に乗て乘懸り、指通しく、首ふつ
 つと搔切て、につこと笑ひし心の内、嬉しさ類なかりけり。柳「なふく」姫宮様、お身には
 怪我もなかつたか。舟は其儘其處にか」と、よろほひ寄て、「此躰では船中のお供はならぬ。
 又敵が寄せ來れば、最うどふも叶はぬ。潮に任せ何處迄も落ち給へ。沖へ舟の出るまでは、
 このそんが陸に扣へた。敵何萬騎寄たり共、命限り腕限り。さりながら、主従二度の對面は、
 御縁と命計ぞや。随分御無事でく。南無諸天諸佛、別して八大龍神、萬乗の君の姫宮

梅檀女一爲んに
かく
納受一願を聞届
けらる
誰を友千鳥！皇
女居らねば誰を
友とせんと也
冲津波一波は折
るも之故寄せ
と二つにかけた
り

懸轡たる云々
詩經小雅の詩
句、大學に引用
せり、懸轡は暗
聲、意は鳥でも
止る場所あり況
や人に於てをや
と也
我から一虫の名
自らなしたる戀
仲の意と互ひに
とかく

の、御舟を守護し給へや」と、舳取て押出せば、折しも引潮の名残を何と梅檀女、涙
しほるよ汐風に、龍神納受の冲津風、沖を遙に流れ行く。加「あら心安や嬉しや。よし此上
は生延ても我身一つ、死でも誰を友千鳥、生死の海は渡れ共、妻の行衛子の行衛、君が
行衛は覺束波の浮世の海を越へかねし、渡りかねしといはば云へ、此一心の疾風舟、仁
義の櫓、武勇の楫は、折ても折れぬ冲津波、寄せ来る時の聲か」とて、劔に鈍つてた
ぢくく、よろくくよろほひ寄方の、磯山風松の風、亂れし髪を搔上て、四邊を睨ん
で立たりし、和漢女の手本紙、筆にも寫し傳へけり。

第 二 はまづたひ

懸轡たる黄鳥丘隅にとどまる。人として止る所にとどまらずんば、鳥に如かざるべしと
かや。爰に大日本肥前の國、松浦の郡平戸の郷に、釣垂れ網引世を渡る、和藤内三官と
いふ若者有。妻も同じ海士の業、藻に栖む虫の我からと、仲人なしの手枕に、括枕と
締合し、小睦といへる名に愛て、世を睦しく暮しけり。そも此和藤内が父は、元日本の
者ならず、大明國の忠臣、大師大爺鄭芝龍といつし者なりしが、暗き帝を諫めかね、自

長沙の罪一買設の配所、一官の放逐せらるるに寄せたり

沙頭云々一平家物語三にある句かいどり一具探りと柄襦にかく

寄生蟲一空貝殻の中に宿る蟹たいらぎ一どぶ貝に似た貝、たいら

猿類に云々一赤貝に似た小き貝にて我を去る奴なれば榮螺の華骨を振舞ひたい

赤螺一明すにか

見るくい一蛤に似て大方る貝常節一床臥

蛸一染むに皆いひかく

蛤能く氣を吐一

看經一鴨の小子

ら長沙の罪を避け、此日の本に筑紫瀧、老一官と名を改、浦人に契りをこめ、此男を
 設けしゆへ、母が和國の和の字を用ひ、父は唐人唐の聲をかたどつて、和藤内三官と名
 のり、乗、廿余年の春も立、秋も過行十月の、小六月迎暖かや。備中蹴に魚籠提、身の活計
 を夕風に、夫婦連立出にけり。見渡せば、沙頭に印を刻む鷗、沖洲にすだく浦千鳥、潮
 の干瀉を鋤返し、蛤踏んで色々の、かいどり小褻しよほく濡れて、拾ひし貝は何々
 ぞ。寄生蟲、小螺子、淺蛸貝、汐吹き上げの簾貝、ちらと見染し姫貝に、一筆書て送り
 たいらぎ、口明てほやく笑ふ赤貝に、心よせ貝ア、いたら貝、君は酔貝と吸付ど、我
 は鮑の片思ひ。僧や其許の猿類に、喰せたいぞやさどい貝、梅の花貝櫻貝、寝もせで一
 人赤螺の、誰をまてとや、人の見るくい忘れ貝、我二人寢の床節は、身に蛸貝祝貝、門
 出よしの螺貝は、悦びのかひとぞ取にける。中に一つの大蛤、日蔭に口を打開き、取
 人有共白泡の、汐を吹て盛上しは、實にや蛤能く氣を吐て、樓臺を爲すといひしも。
 斯やと見とれ居る處に、磯の藻屑に飛渡り、求食る羽音おもしろく、下り居る鴨の急度
 見付、背怒らし貝一啄と狙ひ寄る。ヤイいはれぬ鳴殿。看經もする身ではが眞の殺生
 かい。蛤も蛤、口をくはつと破戒無慙、飛付てかちくく、啄く處を貝合にしつか

鳴をいふ、佛行に喩へて殺生戒と續けたる也

雪折竹云々初祖に教を乞はんと神光といふ僧雪中竹の折るゝ時來りしも教へず終に臂を切つて教を受たり(難波土産)

連衡一張儀六國に説きて秦と連合せしむる策

と喰締め動かせず。鳴は俄に興覺顔。引つしやくつと羽たよきし、頭を振て岩根に寄せ、打碎かんず鳥の智惠。蛤は砂地の得物、鹽の溜へ引込んと、尻下りに引入る。羽ぶしを張てばつと立、一丈計上れ共、吊られ落ては又立上り、ばつと立てはころりと落、鳴の羽搔き百羽搔、毛を逆立てぞ争ひける。和藤内熱々見て、備中鍛からりと捨「アア面白し。雪折竹に本來の面目を悟、肱を切て、祖師西來意の、輪を開きしも尤かな、斷りかな。我父が教によつて、唐土の兵書を學び、本朝古來名將の合戦、勝負の道理を考へ、軍法に心を委ねしに、今鳴蛤の諍ひによつて、軍法の奥義一時に悟り開けたり。蛤は貝の堅きを頼んで鳴の來るを知らず、鳴は背の鋭に誇つて、蛤の口を閉るを知らず。貝は放さじ、鳴は離れんと、前に氣を張て後を顧るに隙なし。爰に望んで我手も濡らさず、二つを一度に引摺むにいと易く、蛤貝の堅きも詮なく、鳴のはしの尖りも終に其徳なかるべし。是ぞ兩雄を闘はしめて、其虚を討といふ軍法の祕密。唐土には秦の始皇、六國を吞だる連衡の謀。本朝の太平記を見るに、後醍醐の帝天下に王として、蛤の大口開きし政、取締なく、相摸入道といふ鳴鎌倉に羽叩し、奢の背鋭く、吉野千早に鹽を吹せ申せしに、楠正成新田義貞、二つの貝に背を閉攻られ、捲り取た

國性爺合戦

物も一物を

則ち一砂にかく

茶船一種の川
船にて運送に用
上臈一高貴の姫
君

其虛に乗てうつせ貝、蛤共に擱しは逸物の高氏將軍、武略に長ぜし處なり。誠や父一官の牛國は大明韃靼、鳴蛤の國争ひ、今合戦最中と傳へ聞。あはれ唐土に渡り、此理を以て彼理を推し、攻戦ふ程ならば、大明韃靼兩國を、一呑にせん物お」と、眼も放さず王夫を凝し、思ひ初たる武士の、一念の末ぞ逞しき。理かな、此男唐土に押渡り、大明韃靼を平均し、異國本朝に名を揚し、延平王國性命は、此若者の事成けり。小睦遠目に、「なふくもう汐がさいて来る。何をきよろりとしてぞいの」と、走り寄て、「是は扱鳴と蛤と口吸ふか。女夫といふ事今知た。如何やら犬の様で見共ない。どりや放して取らせふ」と。斧抜て口押割れば、鳴も悦び蘆邊を指して、滿來る汐に蛤の、則隠れ沈みけり。

もろこしふね

和ハア時雨そふな、いざ歸らふ」と、見遣る洲崎に楫を絶へ、搖れ寄るは珍しい作りな船。「鯨舟でもなし唐の茶舟か」小何じや知らぬ」と舟底見れば、唐土人と覺しくて二八餘りの上臈の、芙蓉の顔柳の肩、袖は涙の汐風に、化粧も剥て面瘦て、哀にも美しく、

ひよんな事——と
んでもない事

なむきやら云々
—禪宗にて常誦
する經文の句を
唐音らしくした
るもの以下皆此
類

雨に萎れし初花に、目鼻を付し如くなり。小睦小聲に成、「ありや繪に書て有唐の后、いたづらして流された物じやわいの」和「ア、そうじやくよい推量。おれは悪ふ合點して、楊貴妃の幽靈かと思ふて怖かつた。何ンでも能女房じやないかいな」小「ムウ嫌らし、唐の女房が目につくか。親父様が始の様に唐にござつて、此方も彼方で生れたら、彼の様な女房抱て寝さしやらふが、日本に生れた因果に、私が様な女房持て口惜からふの」和「ハテひよんな事計。なんほ美しうても、唐の女房の衣裳付頭付、辨才天を見る様で、勿躰なふて氣が張て、寝られはせぬ」とぞ笑ひける。其隙に上藤濱邊に下りて夫婦を招き、「日本人く、なむきやらちよんのふとらやあく」と有ければ小睦ふつと笑ひ出し、「ありや何ンといふお經じや」と、腹を抱へて可笑がる。和「ヤイく笑ふな。あれは日本人爰へおじや頼たい、といふ事」と、押除て立寄れば、上藤涙にくれながら、「大明ちんしんにようろ、君けんくるめいたかりんかんきう、さいもうすがすんへいする共、こんなかりんとんな、ありしてけんさんはいろ。とらやあく」と計にて、又潛々と泣給へば、小睦は濱邊に轉りと臥、腹筋捻て堪へかぬる。和藤内は常々父が詞の唐韻覺へ、はつと手を突き頭を下け、和「うすくうさすはもう、さきがちんぶりかくさんきんないろ。きん

何時の便宜いつのべんぎに
つ唐山たうざんに便りし
て女にに關係した
となり

にやうく」と、手を打て、互たがひに染々手しんざんてを取組とりくみ、悲歎ひたんの涙なみだ睦じつまじし。小睦こせつはくはつとせ
き上あひ、胸むねぐら取て、「これ男おとこ、唐人たうじん詞聞ことばきたふない。如何いかにいたづらすれば迎むか、何時いつの便宜べんぎ
に唐三たうざん界がい、餘あまりな稼かせぎじや。やい其處そこなとらやあや、此方こつちの大事だいじの男おとこを、能よもくきんに
やうくにしたなあ。日本にほんの男おとこの鹽梅あんないは、吸すふて見る事ことも成なるまい。此鹽梅このあんない喰くふて見よ」と
備中びちゆう蹴く振は上あれば、和藤わとう内ないひつたくり、「ヤイ眼めをあいて恪氣りんきせい。是こそ日比ひひ語りし父ちち一
官くわんの古いにしへの主君しゆくん、大明たいめいの帝みかどの御妹おとこ梅うめ檀たん皇女かうによ、國くにの亂らんにて吹流ふきなされ給ふとの御物語おんものかたり、見捨みすて
がたなく悼いたはしし。直すに我家わがやへお供ともせば、庄屋しやうやの斷ことわり代官だいくわん所の詮義せんぎ、何なんの彼かのと喧やかましじ。
兎角かぐおん親父おやぢと談合だんがふ。おぬしは内うちへ返かへつて、早々さうさう是こゝへ同道どうだうせい。人ひとの見みぬ中ちゆう早はやうく」とい
ひければ、小睦こせつもはつと手を打て、「扱うもくおいとしや。同じおなじ日本にほんの内うちさへも、王位わうゐ高かう
貴ひめの姫君ひめぎみは、荒あひ風かぜにも當あぬと聞き。況ましてやは見みぬ唐土たうどの王胤わういんの淺あましき御姿おんすがたや。所ところ
も多おほきに爰こゝへお舟ふねの寄事よきことも、主従しゆうじゆうの御縁ごえん深ふかきゆへ。追付おつつけ親父おやぢ様さま呼よぶで來きませう。アアお
いとしのとらやあや、きんにやうく」と、涙なみだにくれ、家路いへぢにこそは歸かへりけれ。斯かくとは知
らず一官いつくわん夫婦ふうふ、不ふ思議しぎの瑞夢ずいむ蒙かうりしと、當國たうこく松浦まつらの住吉すみやに詣まふで歸かへるさの濱傳はまづたひ、和わな
ふく」と聲こゑをかけて招まねき寄よせ、和わ「柁せん檀たん皇女かうによ亂國らんこくを遁のがれ、御舟おんふねは是こゝへ流ながれよる。悼いたはしき有あり

まざく一眞々の字にてありありと也
奥の轉語か
まんくはう一蓮

様」と、聞も敢ず一官夫婦、あつと頭を地に付て、「御聞及びも候はん。某は古への鄭芝龍と申者、只今の妻や子は、日本の者にて候へ共、舊恩を報ぜずんば忠臣の道立べからず。某こそ年寄たれ、此世忤兵事軍術を嗜み、御覽の如く骨太に生れ付、大膽不敵の強力者。今一度大明の御代に翻し、冥途に在す先帝の震襟を安んじ奉らん。御心安く思召せ」と、世に頼もしく申上れば、皇女御涙にくれ給ひ、「扱は聞及びたる鄭芝龍とは御身よの。李滔天が悪逆、韃靼國と心を合せ、兇帝を失ひ國を奪ひ、妾も既に害せられんとしたりしを、吳三桂夫婦の臣が介抱にて、今日の今迄惜からぬ、露の命のつれなさを、頼む」と計宣ひて、又潸然と泣給ひ、互に通ずる詞の末、縁につるれば唐のもの、くひの八千度繰返す、昔語ぞ哀成。母も袂を絞りかね、「實に誠斯様の事を承らん印にや、今朝曉夫婦變らぬ夢の告、軍は二千里を出て西に利有と云事を、まざく一と見て候。ヤア和藤内、此夢を考、君御出世の忠勤を勵むべし。如何にく」と有ければ、和藤内謹んで、「只今某此濱にて、鴨の鳥と蛤、希代の業を見受しより、軍法のおんくはうを悟開いて候。千里を出て西に利有とは、大明國は我國より、西に當つて千里の波濤、軍法の法の字は、散水に去と書。散水は水なり、水を去とは此出汐の水に任せ、早く日本の地を去る

本卦云々師の卦は六十四卦の一にて専ら軍の事を斷りたる卦(雜波土産)

天の時云々軍の利は何よりも人の和が第一となり(孟子)あらみさき一日本紀に荒魂爲先鋒而導師船とある荒魂也

べしとの神の告、我等が本卦師の卦に當て、師は軍の義なり。坤上坎下の卦躰、一陽を以て衆陰をすぶるといつば、我一身を以て數萬騎の軍兵を従へ有つ大將。今散水のさす潮に、早く日本の地を去て、南京北京に押渡り、浮世にながらへ有ならば、吳三桂と軍慮を合せ、李蹈天が賊徒を亡し、軍勢催し韃靼へ逆寄に押寄せ、韃靼頭の芥子坊主、捻首貫き追伏せ切伏せ、御代長久の凱歌を上ん事、和藤内が心魂に徹する處。天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず。吉凶は人によつて日によらず。此儘直に御出船、途すがら島島の夷を語り、案の中成軍せん。御出陣」と勇みしは、三韓退治の神功皇后艦船に立しあらみさきを、今見る如き勢ひなり。父は大きに感心し、「ヲ、潔よし頼もしし。誠や一粒の花の種は地中に朽ず、終に千輪の梢に上るといふ本文、實に一官が子成ぞや。我々夫婦も同船にて御供申べきが、大勢は目に立て所々の渡海の番所、國の咎め恐れ有。夫婦密に藤津の浦より出船すべし。おことは是より乗出し、便よき小島に姫宮を預け置。船路を變へて追付よ。親子が忠心正直の頭に宿る神風は、船中何の氣遣なし。出合ふ所は唐土に隠れなき、千里が竹にて相待べし。急げく」と姫宮にお暇申、夫婦は遙に別れゆく。和藤内、姫宮の御手を引、元の唐船に移し乗せ參らせ、押出さんとする處に、女房息を切て

身躰—身代

「機不云—阿
玩にたるも時に
よると也

走付はしりつき 船ふねの纜ともづな しつかと取、少ムウ内うちには親仁おやぢ様母様さまははさまも皆みなお留主るす。異いな事ことと思おもひしに、
 道理だうりこそ是これじや物もの。親子おやことつくと談合だんがふしめ、親御おやごの國くにからお内義ないぎよ呼よび、此小睦このこむつを置去おきざりに
 親子夫婦おやこ四人連づれ、唐から八身躰しんたいびく引氣ひきじやの。餘あんまりむごい情つれない。何なんの見落みおち仕落おちが有あ。唐高麗からかうらい
 は愚おろかの事こと。天竺雲てんぢくもの果迄はてまでも、共つれに連つれんと云交いひかはした二人ふたりの中なか、媒人なかくしもない挨拶あいさつない、二人ふたり
 が胸むねと胸むねとに起請きせうも誓紙せしも納なめて有あ。なんほう厭あかれた中成共なかなりとも、今迄いままでの情なさけに、せめて同舟おなじふねに
 乗のせ、五里ごりも十里じりも沖中おきなの波なみに沈しづめて、鯨かや鮫さめの餌えに成共なるとも、夫をつとの手てから殺ころして下くだされ藤内とうない
 殿どのと、舳板へいたを叩たたき泣なくどき、放はなさん氣色きしよくはなかりけり。和わエ、大事だいじの門出かどで不吉ふきつの吠へい吠うら、
 其處そこ立退たちけ目めに物見ものみせん」と、權振かいはりあ上あれば、姬宮ひめみや慌あわて縋すがり付つき、留とどめ給たまふを押退おしのけ、權かも
 折をれよと舟端ふなはたたよき、威おどしに打うつ身を受うけて、少うた打うれて死しねば本望ほんまう」と、渣邊はまべにどうと臥ふし
 轉まり、聲こゑも惜をします歎なげきしが一いエ、是これでも死しなれぬな。ア、よし／＼今いまは是迄こゝまで、結構けつこう者しやも
 事ことによる。此海底このかいていに身みを沈しづめ、噴ふん吐とは嫉妬しつどの大蛇だいじやと成なつ、もとの契ちぎりは今日けふの仇あ、今いまに
 思おもひしらせん」と、石いしを袂たもとに拾ひろひ入いれ、巖いはの肩かたに攀よれば、廬上かへあがつて和藤内わとうない抱留いださめて、「やい
 こりや粗相そさうすな、心底しんてい見付みつけた。軍いくさなかばの大明朝たいみんこく、一事こと太平たいへいに治をさまらぬ迄ひのみや、姫宮ひめみやを汝あつひに預あづけ、日本にっぽん
 に留とどめ置おかと思おもへ共とも、筋すぢなき女の心こゝろを窺うかがひ、態情わざとつれなく見みせたるぞ。是これは四百よひ余州よしうと釣替つりがべの

姫宮をしつかと預置からは、男の心かはらぬ證據。姫宮に仕へ奉るは、舅に孝行、夫に仕ふる百倍ぞや。命にかけて頼み入。國治て迎ひの御舟のお供せよ」と、宥むれば聞入て、少此方には氣遣せず、随分無事で御座れや」と、いへ共弱る女心、「責て一夜の覺悟もせず、夢見た様な別れや」と、夫の袖に縋付わつと計に泣叫ぶ、心の内ぞやるせなき。和藤内も胸塞り、至極の思ひに目も暗み、共に心は亂るれど、斯ては果じいざさらば、さらばくの暇乞、梅檀女も涙ながら、「追付迎ひの輿を待ッ其時伴ひ歸るべし。必早ふ」と宣へば、畏て和藤内、泣くく舟を押し出す。又纜に取付て、少云残せし事の有、暫くのふ」と引留むる。和エ、聞分なし」と引切て、舟をふかみへ漕出せば、詮方波に身を浸し、只手を上て、少舟よなふ、舟よ」と呼べど出舟の、かいなき巖に駈上り、足を爪立延上り、見送る影も遠ざかる。「唐土の望夫山、吾朝の領巾廳山、今の我身の我思ひ、石共なれ、山共なれ、動かじ去らじ」と搔口説き、涙限聲限、互に呼れ招かれて、姿を隠す汐曇り、聲を隔つる沖津波、沖の鷗磯千鳥、泣焦れてぞ 三重

千里が竹

望夫山—此山にて夫が虎に喰はれしを妻虎に似たる石を射たりしより此名あり
 (難波土産)
 領巾廳山—大伴旅手彦の妻の故事

鷹護一逢よにか

育てば云々
木は露の露
得ては花の父母
たり(謡曲熊野)

尋陽江一博陽
江、白樂天の
舊行に詠殘され
し大江

江上別れ行舟路の末も不知火の、筑紫は雲に埋めども、後に鷹護の神風や、千波萬波を
 押切て、時も違へず親子の舟、唐土の地にも著にけり。鄭芝龍一官は、古郷へ歸る唐錦、
 裝束引替へ妻子に向ひ、「我本國と云ながら、時遷り代變り、天下悉李蹈天が引入に
 て、韃靼夷の奴と成、昔の朋友一族とて、誰を尋ん様もなく、司馬將軍吳三桂が、生死の
 有かも知れざれば、何を以て義兵の旗を上、何國を一城に楯籠るべき所もなし。然に某
 去、天啓五年此國を立退き、日本へ渡る時、二歳に成し娘の子を、乳母が袖に捨置しが、
 其子が母は産落して當座に死す。かくいふ父は八重の鹽路の中絶えて、何時父母も知ら
 ぬ身が、育てば育つ草木の、雨露の恵に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して今
 五常軍甘輝といふ大名、一城の主の妻と成山、商人の便に聞及ぶ。頼む方は是計。親を
 慕ふ心有て娘さへ承引せば、犁の甘輝もやすくと頼まるべし。是より道の程百八十里、
 打連れては人もあやしめん。我一人道を變へ、和藤内は母を具し、日本の獵船の吹流さ
 れしと、頼智を以人家に憩ひ追付べし。これより先は音に聞ゆる千里が竹連虎の住む大
 藪有。江戸それを過れば尋陽の江、これ猩々の住處。風景聳るし高山は、赤壁連昔東坡が配
 所ぞや。それよりは甘輝が在城、獅子が城へは程もなし。其赤壁にて待揃へ、萬事を謀

たつき一たよ
り、一本立木
ほうどくわ云々
—惘然と自失す
る

宿なし旅の—
本宿なし旅は
笛—喇叭に似て
管に七孔あり

虎嘯けば云々
虎嘯而谷風至、
龍舉而景雲屬
(淮南子)
楊香—父虎に仰
へられしを楊香

合すべし」と、方角とても白雲の、日影を心覺へにて、東西へこそ三重別れけれ。教に任せ和藤内、人家を求め忍ばんと、甲斐くしく母を負、たつきも知らぬ岩巖石、古木の根ざし瀧津波、飛越へ跳越へ、飛鳥の如く急け共、末果しなき大明國、人里絶えて廣々たる千里が竹に迷入。和藤内ほうどくはを抜かし、「なふ母者人、此脚骨に覺え有。もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふ事か、行ば行くほど敷の中。ムウ合點たり。方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。化さば化せ。宿なし旅の行付次第、小豆の飯の相伴」と、根笹大竹押分踏分、猶奥深く行先に、怪しや數萬の人数、攻鼓攻太鼓、喇叭、高音をそらし、ひやうくとこそ聞えけれ。「すは我々を見咎めて、敵の取巻く攻太鼓か、又は狐の爲す業か」と、忙然たる其折節、空冷じく風起り、砂を穿ちどうくどう、竹葉颯と巻き立く、吹き折る竹は刃の如く、凄しなん共おろかなり。和藤内ちつ共臆せず、「讀めたりく。扱は異國の虎狩な。あの鉦太鼓は列卒の者、爰は聞ゆる千里が原、虎嘯けば風起る、猛獸の所爲と覺へたり。二十四孝の楊香は、孝行の徳によつて、自然と脱れし惡虎の難。其孝行には劣る共、忠義に勇む我勇力、唐へ渡つて力始。神力ますく、日本力、刃でむかふは大人氣なし。虎は愚象でも鬼でも一挫ぎ」と、尻引からけ身

十四歳の時救ひ
たる話
ひつからげ一帯
をからげる
西天一天空

大童一結びし髪
の解けしさま
神より受し云々
身體髪膚受之父
母不取毀傷孝之
始也(孝經)
五十鈴川一いま
すにかく

繕ひ、母を圍ふて立ッたるは、西天の獅子王も恐れつべうぞ見えてけり。案に違はず吹風と、共に荒たる猛虎の形、ふし根に頬をすり付く、岩角に爪研ぎ立、二人を目がけ喰ふるを事共せず、毛手に攪り妻手に受、振つて懸れば身をかはし、撓めばひらりと乗移り、上に成下に成、命競べ根競べ、聲を力にゑいく。虎の怒毛怒聲、山も頽るよ、三重如くなり。和藤内も大童、虎も半分毛をむしらられ、兩方共に息疲れ、石上に突立ば、虎も岩間に小首を投げ、大息吐いだる其響、吹輪吹が如くなり。母藪影より走出、母「ヤア」和藤内、神國に生れて神より受し身軀髪膚、畜類に出合力だてして怪我するな。日本の地は離るる共、神は我身に五十鈴川、大神宮の御祓、納受などかなからんや」と、肌の守を渡さるれば、和「實に尤」と押戴き、虎に差向け差上れば、神國神祕の其不思議、猛りに猛る勢も、忽尾を伏せ耳を垂れ、じりよくと四足を縮め、恐れ戦き岩洞に隠れ入、尾筒を擱んで跳返し、打伏せくひるむ處を乗懸り、足下にしつかと踏へしは、天斑駒、素戔嗚尊の神力、天照神の威徳ぞ有難き。かよる處に列卒の者、群り來る其中に、大將と覺しき者ナ音上、「ヤア」奴は何國の風來人、我が高名を妨ぐる。其虎は忝も主君右軍將李踏天より、韃靼王へ獻上の爲、狩出したる虎成ぞ。早々渡せ。異議に及ばよ

しやぐはん一難
波土産に射官と
あれど冠者を逆
に唐音めかした
るなるべし
餓鬼も云々一詰
ちぬ者も一益あ
る謔
しほらしい云々
一感心な事ぬか
す

色めく一ひるむ
事

打殺さん。しやぐはんく」と、喚きける。李滔天と聞よりも、願ふ處と笑つほに入、和「ヤア餓鬼も人数、しほらしい事ほざいたり。身が生國は大日本、風來とは舌長し。左程欲がる虎ならば、主君と頼む李滔天とやら石花菜とやら、爰へ突出し佗事させい。直に逢ふて用も有。さもない内はいかな事、ならぬく」と睨付る。安「ヤア物ないはせそ討取れ」と、一度に劔をはらりと抜く。和「心得たり」と守を虎の首にかけ、母の傍に引据ゆれば、繫ぎし如くに働かず。「ヲ、心易し」と、太刀指翳し、群る中へ割て入、八方無盡に割立く撫捲る。列卒の大將安大人、官人引具し立歸り、安「おのれ老ほれ餘さじ」と、一文字に切懸る、猶も神明應護の印、神力虎に加はつて、むつくと起て身慄し、敵に向ひ齒を鳴し、猛りうなりて飛懸る「こは叶はじ」と安大人、列卒の者が指たる劔、かり鉞數鑽、手に當るを幸に、投付く、三重打かくる。虎は神力自在を得、劔を宙に引喰へく、岩に打當微塵になす。刃の光り玉散る霰、氷を碎くに異ならず。打物つくれば官人共、色めき立て辻惑ふ。後より和藤内「どつこい遣らぬ」と顯れ出、安大人が素首を掴んで指上、くるく」と振廻し、「ゑいやつ」と打付れば、岩に熟柿を打ごとく、五躰ひしけて失にけり。此勢に官人原、跡へ戻れば惡虎の口、先へ行ば和藤内、仁王立に

頭の鉢の水―頭
の鉢に鉢の水を
つけてと也

突立たり。官ア、申御堪忍、御免々々」と手を合せ、土に喰付泣居たる。和藤内虎の背を撫て、和「うぬ等が小國逆侮る日本人、虎さへ怖がる日本の手並覺たか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が世伴、九州平戸に成長せし和藤内とは我事なり。先帝の妹宮梅檀皇女にめぐり合、三世の恩を報せん爲、父が古郷へ立歸り、國の亂を治なり。サア命惜くば味方につけ。否といへば虎の餌食。否か應か」と詰めかくる。官「ナフ何んの否で御座りましよ。韃靼主に従ふも、李蹈天に従ふも、命が惜さ。向後お前の御家來共。お情頼奉る」と、地に鼻付て畏る。和「チ、出來したく。去ながら我家來に成からは、日本流に月代剃て元服させ、名も改て召使はん」と、指添の小刀はづさし、是も當座の早剃刀、母も手々に受取て、竝ぶ頭の鉢の水、揉や揉ずに無理無躰、片端剃やらこぼつやら、糸鬚厚鬚剃刀次第、瞬間に剃仕廻、二櫛半のはらけ鬚、頭は日本髭は韃靼、身は唐人、互に顔を見合せて、頭冷つく風引て、噓々、村さめくと、涙を流すぞ道理成。親子どつと打笑ひ、「揃ひも揃た供廻り。名も日本に改て何左衛門何兵衛、太郎次郎十郎迄、面々が國所、頭字に名乗、二行に立ッてほつたてろ」「承り候」と、お先手の手振の衆、ちやぐちや左衛門東蒲塞右衛門、呂宋兵衛東京兵衛、暹羅太郎白城次郎、ちや

るなん四郎ほるなん五郎、うんすん六郎すん吉九郎、もうる左衛門、じやが太郎兵衛、さんとめ八郎いぎりす兵衛、今参のお供先、跡に引馬虎斑の駒、母を助けて孝行の、名を取口取國を取、譽は異國本朝に、踏跨けたる鞍鏡、虎の背中に打乗て、威勢を千里に顯はせり。

第三

仁ある云々曹
相が慈父不能
愛無益之子仁
君不能驚無用
之臣(の句を取
る

仁ある君も用なき臣は養ふ事能はず、慈有父も益なき子は愛する事能はず。大和唐土様様に、道の巷は別れるれど、迷はで急ぐ誠の道、赤壁山の麓にて、親子三人めぐり合、我輩と計聞及ぶ、五常軍甘輝が館城、獅子が城にぞ著にける。聞しに優る要害は、未だ牙返る春の夜の、霜に晃く軒の瓦、鱗天に鱗振て、石壘高く築上たり。堀の水藍に似て繩を引が如く、末は黄河に流れ入、樓門堅く鎖せり。城内には夜廻りの鐸の聲喧すく、矢間に弩透間なく、所々に石火矢を仕掛置、すはと云はど打放さん其勢、和國に目馴ぬ要害なり。一官案に相違し、「亂世といひ、斯るきびしき城門事々敷、夜中に敲き、聞も馴ぬ舅が、日本より來りしなんと云共、誠と思ひ取次者も有まじ。假令娘が聞たり共、二歳

行合姉—異父同
母を行合兄弟と
いふ、それを異
母姉の義に轉用
せし也

で別れ、日本へ渡りし父といか成證據を語る共、容易く城中へ入れん事難かるべし。如何はせん」とぞ私語きける。和藤内閣もあへず、「今更驚く事ならず。一身の外味方なしとは、日本を出る時より覺悟の前。遂に見ぬ舅よ聲よと親み立して不覺をとらんより、頼まれうか頼まれぬか一口商ひ、否といはど即座の敵。二歳で別れし娘なれば、我等共行合姉。彼奴孝行の心あらば、日本の風も懐しく、文の便も有べきに、頼まれぬ心底。我竹林の虎狩に従へし島夷を、軍兵の元手にして切靡ける程ならば、五萬や十萬勢の付は隙入らず。何の人頼み、此門蹴破り不孝の姉が首捻切、聲の甘輝と一勝負」と、跳出れば、母繩付押し止め、「其娘御の心入は知らね共、夫に連れて世の中の、儘にならぬは女ならひ。父とは親子、御身とは胤一つ、他人は自ら獨にて、海山千里を隔てよも、繼母といふ名は脱れず。娘の心に親兄弟戀慕ふまい物でもなし。其處へ切込んで、日本の繼母が妬みなりといはれんは、我恥計か日本の國の恥。御身不肖の身を以テ、韃靼の大敵を攻破り、大明の御代に返さんと、大義を思ひ立からは、私の恥を捨、我身の無念を堪忍し、人を懐け従へ、一人の雜兵も味方に招き入るこそ、軍法のもとと聞。況して聲の甘輝は一城の主、一方の大將、是を味方に頼むこと、大方にて成べきか。心を修め案内せよ」

推參—無禮

打ちしやゾー打
ちつぶせ

我妻—我夫

と制すれば、和藤内門外に大音上、「五常軍甘輝公直談申度事有。開門々々」と敲きしは、城中響く計なり。當番の兵士聲々に、「主君甘輝公は大王の召に依て、昨日より出仕有。何時御歸りも計られず。御留守といひ夜中といひ、何者なれば直談とは推參至極。云ふ事あらば夫から申せ。御歸りの節披露して取らすべし」とぞ呼はりける。一官小聲に成、「イヤ人傳に申事ならず。甘輝公の留守ならば、御内室の女性へ直に逢て申べし。日本より渡りし者と申せば合點の有筈」と、いひも果ぬに城中騒ぎ、兵我々さへ面も拜まぬ御臺所、對面せんとは不敵者。殊に日本人とや、油斷するな」と、高提灯、鐙、鏡鉢を打立々々、堀の上には數多の兵、鐵炮の筒先揃へ、「石火矢放して打ちしやけ、火繩よ玉よ」と弄きける。奥へ斯とや聞えけん、妻の女房樓門に駈上り、「ア、騒ぐなく。聞屈て自が、それよと聲をかくる迄、鐵炮放すな粗忽すな。ナフク門外の人々、五常軍甘輝が妻錦祥女とは我事。天下悉、韃靼の大王に靡き、世に従ふ我妻も、大王の幕下に屬し、此城を預り、守り厳しき折も折、夫の留守の女房に逢はんとは心得ず。去ながら日本とあれば懐しし。身の上を語られよ、聞まほしや」と云ふ中にも、錦「若も我親か。何ゆへ尋給ふぞ」と、心もとなさあぶなさに、懐かしさも先立て、「兵共粗相すな。むさと

鐵炮放すな」と、心遣ぞ道理なる。一官も始て見る娘の貌も臘月、涙に曇る聲を上、「粗忽の申事ながら、御身の父は大明の鄭芝龍、母は當座に空しく成、父は逆鱗蒙り、日本へ身退く其時は二歳にて、親子名残の浮別れ、辨へなく共乳母が噂、物語にも聞つらん。我こそ父の鄭芝龍、日本肥前の國平戸の浦に年を経て、今の名は老一官。日本で設けし弟は此男、是成は今の母。私に語り頼度事有て、成果し此姿、恥を包まず來りしぞ。門を開かせたべかし」と、染々口説く詞の末、思ひ當りて錦祥女、「扱は父か」と飛下て、総付たや顔見たや。心は千々に亂るれど、さすが一城の主甘輝が妻。下々の見る處、涙を押へて、錦「一々覺え有事ながら、證據なくては有論なり。自が父といふ證據あらば聞まほし」と、いふより兵口々に、「證據く、證據を出せく」二ハテ親子といふより別にかはつた證據もなし」そりや曲者よ」と、鐵炮の筒先一度にはらりと突懸る。和藤内廂隔て、「無用の鐵炮、ほん共いはせば無切にしてくれん」兵イヤしやつめ共に遁すな」と、火蓋を切て取圍み、「證據々々」と責かけて、既に危く見へけるが、一官兩手を上げて、「ア、是々、證據は其方に有筈。一歳唐土を立退く時、成人の後形見にせよ、と我形を繪に寫し、乳母に預置つるが、老の姿は變る共、面影残る繪に合せ、疑ひを晴れ給へ」

我影にも云々
錦祥女父の顔が
自分の顔にもよ
く似て額の墨子
迄父君にある上
は疑なしと也

鷓そのこはなふ其詞そのこはがはや證據たと、肌はたに放はなさぬ姿繪すがたえを高欄かうらんに押開おしひらき、柄付えつきの鏡かげみどり取出いし、月つきに映うつらふ父ちちの顔かほ、鏡かげみの面おもてに近ちか々と、寫うつし取とて引比ひべ、引合ひせて能々よくよく見れば、繪えにとどめしは古いにしへの、顔かほも艶つや有あ翠あざの鬢みづ、鏡かげみは今の老簀おいやつれ、頭かぶの雪ゆきとかはれ共とも、かはらで残のこる面影おもかげの、目元めもと口元くちもと其儘そのまに、我影わがかげにもさも似にたり。爺方てふかた譲ゆづりの額ひたじの痕ほくろ、親子おやこの印しるし疑うたがひなし。鷓まこ扱まは誠まことの父上ちちうへか。なふ懐なつかしや戀こひしや。母ははは冥途めいごの苦くの下した、日本にっぽんとやらんに父上ちちうへ有あと計はかりにて、便たよりを聞きん知邊しるべもなく、東ひがしの果はてと聞きからに、明あれば朝日あさひを父ちちぞと拜まがみ、暮くるれば世界せかいの圖づを開ひらき、是こゝは唐土たうし是こゝは日本にっぽん、父ちちは爰こゝに在ますよ、と繪圖えづでは近ちかい様やうなれど、三千余里よちの彼方あなとや。此世このよの對面たいめん思おもひ斷たへ、若もしや冥途めいごで逢あふ事こともと、死しなぬ先さきから來世らいせを待まち、歎なげき暮くらし泣明なみし、廿年にじふねんの夜よる晝ひるは、我身わがみさへ辛つらかりし。能よふ生いて居ゐて下くださつて、父ちちを拜まがむ有難ありがたや」と、聲こゑも惜をしまぬ嬉うれし泣なき。一官いっくわんは咽返せがへり、樓門ろうもんに緋付すがりき見上みあれば見下みおろして、心餘こころありて詞ことばなく、盡つきぬ涙なみだぞ哀あはれる。武勇ぶゆうに邁はやる和藤内わふぢない、母諸ははもろ共に伏沈ふしじゆめば、心こゝろなき兵つはものも、溢こぼす涙なみだに鐵炮てつぱうの、火繩ひなはも濕しめるばかりなり。稍やありて一官いっくわん、「我々われは來くる事こと、聳びの甘輝かんきを密ひそかに頼度たのま一大事いちだいじ。先まづ先御身まごみに語かたるべし。門開かたかせて城內じやうないへ入いれたべ」鷓まこなふ仰おほせなく共とも是こゝへと申まを言なれ共とも、此國このくに未いだ軍半いくさなか、韃靼たつたん王わうの掟おきてにて、親類しんるい縁者えんじやたり共とも、他國たこく者は城內じやうないへ、堅かたく禁制さんせいとの掟おきてな

きこらい云々
例の意味なし強
ていはと歸去來
と觀音薩埵の轉
倒ならん
此はく一本此
婆々

繩かくれ一本
繩をかかれ

どんな事一鈍な
事

浮目一憂目
械税一手足を束
縛する刑具

り。され共是は各別。こりや兵共、如何せん」と有ければ。了簡もなき唐人共、「いや
いや思ひも寄らぬ事、成らぬく。歸去來く、びんくはんたさつ、ぶおんく」と又
鐵炮を差向へば、人々案に相違して、惘れ果て見へけるが、母進み出、「尤々、大王より
掟とあれば力なし。去ながら、年寄た此はよに何の要心入べきぞ。彼の姫に只一言物語
する計。妾一人通して給べ。誠浮世の情ぞ」と、手を合せても聞入ず。兵否々女、迎宥免
せよとの仰はなし。然らば我々了簡して、城内に有中は、繩をかけて縛り置、繩付にし
て通せば、韃靼王へ聞えても、主君の云譯我等が身晴れ。急いで繩かよれよ。夫が否な
ら、歸去來く、びんくはんたさつ、ぶおんく」と睨つくる。和藤内眼をくはつと嗔ら
し、「ヤイ毛唐人、己奴等が耳は何處に付て何と聞。忝くも鄭芝龍一官が女房、身がこ
姫の爲にも母同前。犬猫を飼ふ様に繩付て通さんとは、日本人はどんな事聞て居ぬ。小
むつかしい城内入らひでも大事ない。サア御座れ」と引立る。母振放し、「それく今云
しを忘れしか。大事を人に頼む身は、幾度か様々の浮目も有恥も有。繩はおろか、械
柄にかよつても、願ひさへ叶はど瓦に金を換るが如し。小國なれ共日本は男も女も義は捨
ず。繩懸給へ一官殿」と、恥しめられて力なく、用心の腰繩取出し、高手小手に縛上

菩提門云々一佛の道に赴く意にて成就に譬へ無明の闇を不成就にたとふ

雪の梅云々一錦祥女の孝行に譬ふ、又錦女のやさしき詞も母に

親子が顔を見合せて、笑顔をつくる日本の、人の育ちぞ健氣成。錦祥女も堪へかぬる、歎きの色を押包み、錦「何事も時世にて、國の掟は是非もなし。母御は自が預る上は氣遣なし。何事か存ぜね共、御願ひの一通りお物語承り、夫甘輝に云聞せ、何卒叶へ參らせん。扱此城の廻に鑿たる堀の水の上は、自が化粧殿の、庭より落る遣水の、末は黄河の河水と流れ入ル水筋なり。妻の甘輝が聞入て御願ひ成就せば、白粉解て流すべし。川水白く流るとは目出度印と思召、勇んで城へ入給へ。又御願ひ叶はずば、紅葉をといて流すべし。川水赤く流るとは、叶はぬ左右と思召、母御前を講取に門外迄出給へ。善惡二ツは白妙と、唐紅の川水に、心を付て御覽せよ。さらばく」と夕月に、門の戸さつと押開き、伴ふ母は生死の界、菩提門を引かへて、是は浮世の無明門、貫の木てうど下す音、錦祥女は目も暮て、弱きは唐土女の風、和藤内も一官も、泣ぬが日本武士の風、大手の門のたて明に、石火矢打は韃靼風、一つに響く石火矢の、音に聞さへ三重遙成。夢も通はぬ唐土に、通へば通ふ親子の縁、恩愛の綱結び合、結ぶ餘りの縛繩、かよる例は異國にも、まれに咲出す雪の梅、色音は同じ鶯の、聲にぞ通事入らざりし。錦祥女は孝行深く、母を奥の一間に移し、二重の褥三重の蒲團、山海の珍菓名酒を以て、重んじ待遇

かはらぬ故通譯
はいちぬと也

大きに和かなー
例の滑稽

龍眼肉―熟帯に
産する圓形の果
こくせう―味噌
汁にて煮つめた
もの

す有様は、天上の榮花共、又高手小手の縛は、十惡五逆の科人共、見る目いぶせく痛
はしく、様々に宮仕へ、誠の母と勞りし、心の内こそ殊勝なれ。腰本の侍女共寄集り、
甲「何と日本の女子見てか。目も鼻も變らぬが、可笑い髪の様、變つた衣裳の様、若い
女子も彼であらふ。裾も襦もほらくほらくと、ばつと風が吹たら、太股迄見へそう
な。ア、恥しい事じや有まいか」乙「いや、逆も女子に生れるなら、此方や日本の女子
に成たい。何故といや、日本は大きに和ぐ大和の國といふけな。何んと女子の爲には、
大きに和かな、好もしい國じやなひかいの。ホウ有難い國じやの」と、眼を細めてぞ頷
きける。錦祥女立出「是々面白そうに何いふぞ。彼方は、自とは産さぬ中の母上なれば、
孝行といひ義理といひ、誠の母より重けれ共、國の掟詮方なく、縛り掬めるおいとしさ。
韃靼王へ漏聞え、良人に咎めあらふかと、宥免も成がたく、難義といふは我身一つ。孰
れも頼む。食物も違ふとや。お口に合ふ物伺ふて進せてくれよ」と宣へば、侍イヤ申如
才もなふお料理も念入、龍眼肉のお食、お汁は家鴨の油揚、豚のこくせう、羊の濱焼、
牛の蒲鋒、様々にして上ても、なふ忌々しい、其様物嫌々。縛られて手も叶はぬ。つい
むすびをしてくれ」と御意なさるよ。其むすびといふ喰物は、何の事やらどうも合點參ら

むすび―組合
事より相撲取と
見立たり
きれ物―品切
絹笠―絹張の傘

す。皆打寄て詮義致せば、日本では相撲取をむすびと申けな。それゆへ方々尋ても、折しも悪ふお齒に合そな相撲取がきれ物成」とぞ申ける。表に轟く馬車、兵御歸館」と呼はつて、唐櫃先に昇入させ、優々たる絹笠も、さすが五常軍甘輝と名に負ふ其物躰、錦祥女出迎ひ、錦「何とて早き御退出。御前は何と候ぞや」其さればく、韃鞢大王歎感深く過分の御加増、十萬騎の旗頭散騎將軍の官に任せられ、諸侯王の冠、裝束賜り大役仰付らるよ。家の面目これに過ず」と有ければ、錦それはお手柄、目出たいく。なふ家の吉事はかさ成物。日來戀しい床しいと、申暮せし父上、日本にて設け給ひし母兄弟、頼度事有とて門外迄來り給へ共、お留守といひ、厳しき國の掟を憚り、男子は皆歸し、母上計を留置しが、猶も上の聞えを恐れ、繩をかけて、あれ彼の奥の亭にて御馳走は申せ共、胎内借らぬ母上、繩かけし御心底、悲さよ」とぞ語りける。其ムウ繩かけしとはよい簡、上へ聞えて云分有。隨分變應せ。いざ先我も對面せん。案内申せ」といふ聲の、漏聞えてや妻戸の内、母なふ錦祥女、甘輝殿のお歸りか。爰は余り高上り、妾それへ」と立出る。形はいとど老木の松のしめからまれし藤かづら、起居苦しき其風情、甘輝見る目も悼はしく、其誠世の中の子といふ者のあればこそ、山川萬里を越え給ふ、

優曇華一珍らし
い誠
心置るな一遺慮
せらぶな

其甲斐もなき縛めは、時代の掟是非もなし。それ女房、お手が痛むか氣を付よ。優曇華の客人いさよか疎略を存せず。何事成共此甘輝が、身に相應の事ならば、必心置るな」と、世に睦しく待遇せば、老母顔色打解て、「チ、頼もしい忝ない。其詞を聞からは、何しに心置べきぞ。頼入度大事、密に語申たし。是へく」と小聲に成、「なふ我々此度もろこしへ渡りし事、娘ゆかしい計でなし。去年の初冬、肥前の國松浦が磯といふ處へ、大明の帝の御妹、栴檀皇女、小船に召され吹流され、御代を韃靼に奪はれし御物語、聞と齊しく、父は素より明朝の陪臣。我子の和藤内と申者、賤しき海士の手業ながら、唐土日本の軍書を學び、韃靼大王を亡し、昔の御代に翻へし、姫宮を帝位に付んと先日本に遺し置、親子三人此唐土へは來たれ共、淺ましや草木迄皆韃靼に隨ひ靡き、大明の味方に心ざす者一人も候はず。和藤内が片腕の、味方に頼むは甘輝殿、力を添へて下されかし。偏に頼み參らす。是が拜む心ぞ」と、額を膝に押下け、只一筋の心ざし、思込ふでぞ見へにける。甘輝大きに驚き、「ムウ扱は聞及ぶ日本の和藤内と申は、此錦祥女とは兄弟、鄭芝龍一官の子息候な。ム、武勇の程唐土迄も隠れなく、頼もしき思立、尤斯こそ有べけれ。我等も先祖は大明の臣下。帝ほろび給ひてより、頼むべき主君な

お恨とは云々
否といはれても
恨みぬと也

く、韃靼の恩賞被り、月日を送る折から望む所の御頼、早速味方と申度、少存る旨
あれば、急にあつ共申されず。とつくと思案しお返事を」と、いはせも果ず、母ア、ウ
そりや御卑怯な詞が違ふ。是程の一大事、口より出せば世間ぞや。思案の間に漏れ聞え
て、不覺を取悔んでも還らず。お恨とは思ふまじ。成れ成らざれ、お返事をサア只今」
と責つければ、其ムウ急に返答聞たくば易い事。如何にも五常軍甘輝、和藤内が味
方なり」と、いふより早く錦祥女が、胸元取て引寄せ、劔引抜て咽笛に指當る。老母周
章て飛懸り、二人が中へ割て入、持たる手を踏放し、娘を背中に押遣く、仰向に重
臥大聲上て、母是情なや何事ぞ。人に物を頼まれては、女房を刺殺すが唐土の習ひか。
心に染まぬ無心を聞も、女房の縁有ゆへと心腹が立てのことか。但は狂氣か。偶々始て
來て見たる、母親の目の前で殺そうとする無法人、日比が思ひ遣られた。味方をせずば
せぬ迄よ。今迄と違ふて親の有大事の娘。これ怖い事はない、母にしつかと取付や」と、
隔ての垣と身を捨て、圍ひ歎けば錦祥女、夫の心は知らね共、母の情有難さ。錦怪我遊
ばすな」と計にて、共に涙に咽びけり。甘輝飛退つて、「チ、御不審御尤。全く某無法
にあらず、狂氣にも候はず。昨日韃靼王より某を召、此比日本より和藤内といふる者、

小僕下劣の身を以て、智謀軍術逞しく、韃靼王を傾け、大明の世に翻へさんと此土に
 渡る。彼が討手誰ならんと、數千人の諸侯の中より、此甘輝を選出され、散騎將軍の官
 に任じ、十萬騎の大將を給はる。和藤内を我妻の兄弟と、今聞迄は夢にも知らず。彼奴
 日本に傳へ聞、楠木とやらんが肝膽を出、朝比奈、辨慶とやらんが勇力有共、我又孔明
 が腸に分入、樊噲、項羽が骨髓をかつて、一戦に追て追捲り、和藤内が月代首提けて
 來らん、と廣言吐し某が、一太刀も合せず、矢の一本も放さず、ぬくぬくと味方せば、
 五常軍甘輝が日本の武勇に聞怖する者でなし、女に絆され縁に引かれ、腰が抜て弓矢の
 義を忘れし、と韃靼人の雑口にかけれんは必定。然れば子孫末孫の恥辱、遁れがたし。
 恩愛不便の妻を害し、女の縁にひかれざる、義信の二字を額にあて、さつぱりと味方せ
 ん爲。ヤイ錦祥女、留むる母の詞には慈悲心こもり、殺す夫の刃の先には忠孝こもる。
 親の慈悲と忠孝に、命を捨よ女房」と、理非を飾らぬ勇士の詞、錦ヲ、聞わけた。身に
 叶ふた忠孝、親にもらふた此躰、孝行の爲捨るは惜い共思はぬ」と、母を押退け突と寄
 り、胸押明れば引寄せて、見る目危き氷の刃、母なふ悲しや」と、駈隔て、押分けんにも
 詮方なく、のけんとするに手は叶はず、娘の袖に喰付て引退くれば夫が寄る。夫の袖を

親三人一官と
先妻後妻の三人
の中一官と先妻
には生んで貰ひ
し恩あり

くはへて引ば、娘が死んと又立寄るを、口にくはへて唐猫の、疇をかゆる如くにて、母は目もくれ身も疲れ、わつと計にどうと伏し、前後不覺に見へければ、錦祥女縋付、「一生に親知らず、終に一度の孝行なく、何で恩を送らふぞ。死せて給へ母上」と、口説き歎けばわつと泣、母なふ悲しい事いふ人や。殊に御身は娑婆と冥途に親三人、残り二人の父母は産落した大恩有。中に一人の此母は、憐みかけず恩もなく、うたてや繼母の名は削つても削られず。今爰で死なせては、日本の繼母が、三千里隔てたる唐土の繼子を悪んで、見殺しに殺せし、と我身の恥計かは、普く口々に、日本人は邪慳なり、と國の名を引出すは我日本の恥ぞかし。唐を照す日影も、日本を照す日影も、光に二つはなけれ共、日の本とは日の始、仁義五常情有、慈悲専らの神國に生を受た此母が、娘殺すを見物し、そも生て居られふか。願くは此繩が、日本の神々の注連繩と顯はれ、我を今絞殺し、屍は異國に曝す共、魂は日本に導き給へ」と聲を上、道もあり情もあり、哀も籠る口説き泣、錦祥女は縋付、母の袂の諸涙、甘輝も道理に至極して、不覺涙にくれけるが、稍有て甘輝席を打て、「ハツア是非もなし力なし。母の承引なき上は、今日より和藤内とは敵對。老母を是に留め置、人質と思はれんも本意ならず。輿車用意

唐錦—血の涙に
かけたり
錦中絶ゆる—留
田川紅蕪亂れて
流るめり渡らば
錦中やたえなん
(古今集)

尋つて—汝を崇
めて
持てうすれば—
奪取してやれば

して所を尋送り還し參らせよ」錦「いや送る迄もなく、此遣水より黄河迄、よき便には白粉流し、叶はぬ知せは紅を流す約束にて、迎ひにお出有はづ。いで紅解て流さんと、平常の一間に入にけり。母は思ひに搔暮て、思ふに違ふ世の中を、立歸りて妻や子に、何と語り聞せんと、思ひ遣る方派の色、紅より先の唐錦。錦祥女は其隙に、瑠璃の鉢に紅解き入、「是ぞ親と子が渡らぬ錦中絶ゆる、名残は今ぞ」と夕波の、泉水にさらくく、落瀧津瀬の紅葉と、浮世の秋をせき下し、共に染めたる泡沫も、紅潜る遣水の、落て黄河の流れの末、和藤内は巖頭に、簀打被き座を占て、赤白二つの川水に、心を付て水の面、和「南無三寶紅が流るよ。扱は望は叶はぬ。味方もせぬ甘輝奴に、母は預置れず」と、踏出す足の早瀬川、流れをとめて行先の、堀を飛越へ堀を乗越へ、籬透垣踏破り、甘輝が城の奥の庭、泉水にこそ著にけれ。「先母は安穩嬉しや」と飛上り、縛めの繩引斷り、甘輝が前に立はだかり、和「五常軍甘輝といふ髭唐人は利主よな。天にも地にも只た一人の母に繩かけたは、おのれをおのれと奉つて、味方に頼ん爲成に、持てうすれば方圖もない。味方にならぬは此大將が不足なか。第一女房の縁と云、其方から従ふ筈。サア日本不雙の和藤内が、直に頼む返答せい」と、柄に手をかけ突立たり。其ヲ、

便々―無用の話
して時をうつす
(俚言集覽)

女房の縁といへば猶ならぬ。御邊が日本不雙なれば、我は唐土稀代の甘輝、女に絆され味方する勇士にあらず。女房をさる處もなし。病死する迄便々共待れまい。追風次第早歸れ。但置土産に首を置いて行きたいか「和イヤサ日本の土産に己奴が首を」と、兩方拔んとする處を、錦祥女聲をかけ、「ア、く、是なふく、病死を待迄もなし。只今流せし紅の水上を見給へ」と、衣装の胸を押開けば、九寸五分の懷釧乳の下より肝先迄、横に縫ふて指通し、朱に染みたる其有様、母は是はと計にて、かつばと臥て正躰なし。和藤内も動顛し、覺悟を極し夫さへ、不覺に愕く計なり。錦祥女苦しげに、「母上は日本の國の恥を思召、殺すまいとなさるれど、我命を惜みて親兄弟を責がずば、唐土の國の恥と。斯成上は女に心ひかさるよ、人の誹はよも有まじ。なふ甘輝殿、親兄弟の味方して、力共成て給べ、父にもかくと告てたべ。もう物云はせて下さるな。苦いわひの」と計にて、消消とこそ成にけれ。甘輝涙を押隠し、其ヲ、出来いたく。自害を無にはさせまい」と、和藤内が前に頭を下け、「某が先祖は明朝の臣下、進んで味方申べき身の、女の縁に迷ひしと、俗難を憚りしに、我妻只今死を以テ義を勸る上は、心清く御味方。大將軍と仰ぎ、諸侯王に准へ、御名を改、延平王國性爺鄭成功と號し、裝束召せ奉らん」と、武運開くる

章甫の冠云々
殷代の冠と花の
紋を織り付けたる
沓(難波土産)
莫耶(千將莫耶
の如き名劍)
子の御車にさし
附すもの

唐櫃の、二重の錦、羅綾の袂、緋の装束、章甫の冠、花紋の沓、珊瑚琥珀の石の帶、
莫耶の劔金を磨き、絹笠さつと指かくれば、十万余騎の軍兵ども、幢の簇幡の簇、吹抜
き立鉾、弓、鐵炮、鎧の袖を列ねしは、會稽山に越王の、二たび出たる如くなり。母は
大聲高笑ひ、母ア、嬉しや本望や。あれを見や錦祥女、御身が命を捨しゆへ、親子の本
望達したり。親子と思へど天下の本望。此劔は九寸五分なれど、四百余洲を治る自害。
此上に母が存命へては、始の詞虚言と成、二たび日本の國の恥を引起す」と、娘の劔を追
取て、咽喉にがはと突立る。人々「是は」と立騒げば、母ア、寄まいく」と、はつた
と睨み、「なふ甘輝、國性爺、母や娘の最期をも、必歎な悲しむな。韃靼王は面々が、母の
敵妻の敵と、思へば討に力有。氣をたるませぬ母の慈悲。此遺言を忘るよな。父一官が
おはすれば、親には事を缺くまいぞ。母は死して諫めをなし、父は存らへ教訓せば、世
に不足なき大將軍、浮世の思出是迄」と、肝のたばねを一剗り切さばき、「サア錦祥女、
此世に心残らぬか」錦「何しに心残らん」と、いへ共残る夫婦の名残。親子手を取引寄せ
て、國性爺が出立を、見上見下し嬉氣に、笑顔を娑婆の形見にて、一度に息は絶にけり。
鬼を欺く國性爺、龍虎と勇む五常軍、涙に眼は暗め共、母の遺言背くまじ、妻の心を破ら

玉有る淵云々
文選の句

松浦瀉一待つに
かく
ちくち者一何處
へもつかぬ風來
者の意
翡翠の云々か
はせみの羽の如
き青々とした髪
の多い事

充滿其願一充
滿其願如清涼
池一と孟蘭盆經
に出でたり
居合一坐ながら
長刀を抜きて立

じと、國性爺は甘輝を恥、甘輝は又國性爺に、恥て萎るゝ顔かくす。亡骸おさむ道の邊に、出陣の門出と、生死二つを一道の、母が遺言釋迦に經、父が庭訓鬼に鐵棒、討ば勝攻れば取、未代不思議の智仁の勇士。玉有る淵は岸破れず、龍栖む池は水涸れず。斯る勇者の出生す、國々たり君々たる、日本の麒麟是成は、と異國に武徳を照しけり。

其 四

唐土の便今やと松浦瀉、小睦が宿の明暮は、唐の姫宮相住を、近傍隣家も浮名立、唐と日本の汐ざかひ、ちくちら者かと疑へり。夫も今は國性爺と名を改、數萬騎の大將軍と聞からに、我も心の勇み有、若衆出立に態をかへ、撫付鬢の大たぶさ、翡翠の大髻ふつさり、禰宜の息子か膏藥賣か、女とよもや水淺黄の、股引しめて羽織著て、朱鞘木刀眞紅の下緒、花の口紅雪の白粉、菅笠深く脛高く、足元輕き濱千鳥、濱邊傳ひを日參の、印松浦の住吉や、神前にこそ著にけれ。充滿其願と祈誓をかけ、手を合すると見えけるが、閃りと抜たる居合の早業、神木の松を相手取、木刀翳し跳上つて聲をかけ、少ゝゑいやつたうゝゑいゝたう。ゑいやつたう」と上段下段の太刀捌き、陽炎稻妻獅子奮迅

青苔衣を云々
此所謡曲白樂天
の句を引けり

足取手の内四寸八寸身の開き、踏込で打入身の木刀、古木の松の片枝を、すつばと切て落せしは、今牛若共謂つべし。何時の間にか梅檀女、森の影より走出、「ナフク、小睦殿、毎日々々時を違へず變つた風俗。今日といふ今日跡を慕ふて見付しが、誰に習ふて此兵法、器用な事や」と宣へば、小イヤ師匠はなけれど夫の打太刀、習はふより慣ての事。唐土の便心元なく、お迎ひ舟は参らず共、お供して渡らん、と此明神へ吉凶を祈候へば、是見給へ。木刀にて此松の木の、眞劔の如く切れたるは、神納受の印と申、商船の便船時節も能候」と申上れば、梅それは嬉し頼もしし。片時も早く戻して給べ」と、御悦びは淺からず。小御心安く思召せ。惣じて此住吉と申は、船路を守りの御神にて、神功皇后と申帝、新羅退治の御時、汐干玉汐満玉を以御船を守護し、舟玉神共申なり。昔時唐土の白樂天といひし人、日本の智慧を圖らんと、此秋津洲に渡り給ひ、目前の景色を取敢ず、「青苔衣を帶て巖の肩にかより、白雲帯に似て山の腰をめぐる」と詠じ給へば、大明神賤しき釣の翁と現じ、一首の歌の御答へ、「苔衣著たる巖はさもなくて、きぬぐ山の帯をするかな」と、詠じ給ひし御歌に、ぎつと詰つて樂天は、爰より本土に歸るとかや、國を守りの御神の、其御歌は苔衣、我身に受て旅衣、いざ」連二人打連れて、舟路遙けく

三重
なりふりや。

梅檀女道行

唐子留云々一皇
女と小睦の髪容
即ち唐山日本の
風俗を混じてい
へり
枕を疊む云々一
船中の疊枕に盧
生の夢を見、賢
長坊の杖によせ
て千里をたどむ
といへり（難波
土産）
二葉に見せて云
云一兩方にと梅
檀は二葉より芳
せたり
大村一肥前にあ
り、多にかく
廿五筋一廿五歳
にかく
すがきて一彈
ずる事、唐詩の
二十五絃彈夜月
の句によりて文
をなせる也
彈き石投子一子

唐子留には薩摩櫛、島田髻には唐櫛と、大和唐土打まぜて、さしも習はね旅立や、舟
と陸とを行道は、笠捨られず懷中に、枕をたよむ夢たよむ、千里を胸にたよみこむ、女
心の強弓も、男ゆへにぞ引れゆく。我は古郷を出る旅、君は古郷へ戻る旅、二葉に見せ
て梅檀女、小睦がいさめ力にて、大明國へと思立、心の内こそはるかなれ。親と妻とを
持し身は、何か歎きは有明の、月さへ同じ月なれど、なふ二人見馴し閨の中、名残數々
おまじら、大村の、浦の濱風一村雨は、さらくと霽ても晴れぬ我涙、袖に包みて袂に拭ふ、鏡の宮
に影とめて、泣ぬと人や見るめの浦、振さけ見れば久方の、日も行末の空遠く、歸るさ
いつ、何時ぞ天津鴈、誘へや誘へ我夫も、廿五筋の琴の糸、結び契りし年の數、いざすがが
きて箱崎の、松とし聞かば我も急がん。磯部傳ひに寄藻搔く、海士の子共の打群て、彈
き石投子又長か半、三つ四つ五つ算へては、稚遊びも睦じく、七瀬の淀に行水も、昔の
影や隠ん坊、鬼の來ぬ間と謠ひしも、濡て乾かぬ旅衣、唐船を松浦川、港もちかの浦

供の遊戯、はじ
まきも手玉
ちかの捕、筑前
にあり近きにか
く

二千里云々―三
五夜中新月色二
千里外古人心
(白氏文集)

雲の峯―山の如
く見ゆる雲
岩船―丈夫な船
松江―鱧の産
地、江蘇省松江
府にあり

風に、其方の方を見給へば、磯に手繰の厨川、波に揺ると釣舟に、鬢づら結ふたる童子一人、網は下さで釣竿の、いとゆうくと眠來る。梅なふくお兒、我々は唐土へ渡る者。能からん方迄乗て給べ」とぞ仰ける。是「あら何共なや。一人は唐土一人は筑紫人女性に、身に唐土へ渡るとは、戀しき人の有やらん。二千里の外古人の心、三五夜中にあらね共、影を漏さぬ月の舟、疾々召され候へ」と、ハヤ指寄する水刷棹、二人「不思議の縁」と打乗て、焦れ行衛も白波に、風て長閑き海の面、梅續きて見ゆる八十島を、異國の人の家産に、教てたばせ給へとよ」童子舳板に立上り、海原遙に指さして、「いかに旅人聞給へ。先彼に續くは鬼界十二の島、五島七島中にも彼の白き島の、多く群れ居るは白石が島、此方に煙の立登るは硫黄が島、扱又南に高く霞かよるはちどの島なり。あれは往古天照神の、住吉の明神に、笛吹かせ舞曲を奏し、二神の遊び給ひし所とて、二神島とは申なり。なふ唐土人」とぞ語らるよ。語る間に敷島の、はや秋津洲の地を離れ、それより先の島々の、島かと思れば雲の峯、山かと思れば空の海、風はなけれど蟹小舟、天の鳥舟岩舟の、空走り行ごとくにて、山なき西に山見ゆる、月に先立日につれて、日の本出し秋風の、立ちかはらず其儘の、まだ秋風に鱧釣る、松江の港に著にけり。人々

舟より上り給ひ、楫誠にお兒の御情、座したる様成舟の中、かよる波濤を時の間に、渡し給へる御方は、如何成人にて有やらん」兎人がましやな名もなき者、我日の本に昔より、住馴れたれば住吉の、大かい童子と申者。暇申て此童は、ウタイ住吉に立歸り、歸朝を待申さん」と、夕波の汀なる、蟹の小舟を漕戻し、追風に任せつゝ、沖の方に出にけりや。沖の方へぞ三重

九仙山

陶朱公一范蠡

鑿與屬車一天子の御こしと後につく車

ぬるこ鳥一鶴子と書く、鼻の頰

サン傳へ聞、陶朱公は勾踐を伴ひ、會稽山に籠居て、種々の智略を廻らし、遂に吳王を滅して、勾踐の本意を達すとかや。クセ昔を問へば遠き世の、例しも吳三桂が、今身の上に白雲の、山より山に身を隠し、太子を育て奉る。移れば變る苦筵、宮前の楊柳寺前の花、峰の古木に立かはり、夕の霧の間には、我身を以て褥とし、ウタイ鑿與屬車の輦も、蕩の錦に織かへて、朝の露のほとりには、谷の猿の肩に駕し、早二歳は昨日今日、暮るも山明るも山、我名も君が顔ばせも、人目を包む雲水に、虹の架橋途絶して、深山鳥やぬるこ鳥、梢に來鳴く鸚鵡さへ、昔をまねぶ聲はなし。水遠くして山長く、根笹茅原檜檜原、峨

崖鬼一石を置く

中間禪一欲を離れし境界

琴詩酒一琴詩酒友皆松一我雪月花時獨憶君(白氏文集) 應なく一本應もなく 大地世界云々一「若天如圓蓋、地方如碁局」(晉書天文志)

峨と聳へし崖鬼の、山路に疲れ行末は、名にのみ聞しこう化府の、九仙山に攀登り、暫し佇む松風も、馴てや友と住馴れし、蓬眉白髪のお翁二人、石上に碁盤を据へ、黑白二つの石の數、三百六十一目に、離々たる馬目、連々たる鴈行、傍目もふらぬ碁の勝負。心は蜘蛛の空に繫れる糸に似て、身は空蟬の枯枝と成、浮世を離れし手談の技、吳「中間禪の高臺か」と、太子を石段に移し參らせ、枯木の株に願持せ、見ゆる我も諸共に、餘念の塵をや拂ふらむ。吳三桂輿に乘じ、「なふく」老人に物申さん。市中を離れし座隱の遊び面白し。去ながら、琴詩酒の三つの友を離れ、碁を打て勝負を諍ひ給ふ事、別に樂む所ばし候か」翁さして應なく、「碁盤と見れば碁盤にて、碁石と見る目は碁石なり。大地世界を以て、一面の碁盤となすといへる本文有。謠心上の須彌山是に有。大明一國の山河草木、今爰より見るになどか曇らん。一角に九十目、四方に四季の九十目、合せて三百六十目、一目に一日を送ると知らぬ愚かさよ」吳「面白しく。天地一躰の樂に二人對ふは何事ぞ」翁「陰陽二つあらざれば萬物調ふ事もなし」吳「勝負はさて如何に」翁「人間の吉凶は時の運にあらすや」吳「扱白黒は」翁「夜る晝」吳「手談は如何に」翁「軍の法」吳「一切て抑へて跳かけて」二人「軍は花の亂れ碁や。飛かふ鳥、群居る鷺と譬へしも、白き黒き

斧の柄一昔の王
賀山にて仙人の
圍碁を見て斧を
取ちんとするに
その柄朽ちたり
と也暫くの間に
數多の年を經し
事(述異記)

柳櫻をこきませ
一見渡せば柳櫻
をこぎませて都
ぞ春の錦なりけ
る(古今集)

に夜る晝も、別で昔の斧の柄も、自然とや朽ぬべし翁 重てのたまはく、「今日本より國
性爺といふ勇將渡て、大明の味方と成、只今軍眞最中。是より其間遙かなれ共、一心
の碁情眼力に顯然と、合戦の有様目前に見すべし」と、のたまふ聲も山風も、碁石の音
にぞ響きける。吳三桂はつと心付、「實にくゝ爰は九仙山」此九仙山と申は、四百余州を
日の下に、峰もかすかにおほろくくと、雲かと思れば一霞、麓に落る春風の、風のまに
まに吹霽す。空は彌生の中旬なる、平家柳櫻をこきませて、錦に包む城廓の、顯然とこ
そ見えにけれ。何國の誰が籠りしぞ。門高く堀深く、砦々に垣楯築き、要害險阻を帶た
りし、こうくたる高檜、揚る雲雀や歸る鴈、花と見つとも色々の、簇に翼や休むらむ。
長閑に照す朝日影、月影打て付たるは、日の本の美名を顯はし、延平王國性爺が乗取た
る石頭城。いはねどそれと白眞弓、鐵炮高麗矛鍵長刀、大簇小簇靡き合、吹拔のほり
馬印、翻翻とひる返り、天も五色に染なせば、藤も躑躅も山吹も、共に映るふ色見えて春
の日数は盤上の、石の數とぞ積りける。二人「若葉が末の深緑、晴行雲の絶間より、是南京の
雲門關と、名乗て出る杜鵑、幔幕高き卯の花垣、今年も夏の中旬なり」吳舞詞「方三十里に
逆茂木引、關の大將左龍虎右龍虎三千余騎」翁「兜の星を輝かし」吳「太鼓を打て亂調し」

鳥の空音一清少
納言の歌をとれ
り

文治の昔一謡曲
安宅を取れり

到着一將士の到
籍を記録せる文
書
それ情々惟れば
一辨慶勤進帳の
作りかへ
御名もば一御名
をば

褒似一周の幽王
の寵妃

翁「鳥の空音は」吳「は」翁「か」二人「る共、ゆるす方なき威勢に、劔は夏野の薄を亂し、火繩は澤の螢火と、要害厳しき關の戸は、鳥も通はぬ計なり」吳「日本育ちの國性爺、譬へば此關鐵石にて堅めたりとも、押破て通らん事、童が障子一重破るよりも易けれ共、

軍中の目覺しに、我本國文治の昔、武藏坊辨慶が、安宅の關守欺きし、例しを引や梓弓、軍兵に日配せし、國「そもく是は驪山の籠、楊貴妃の御廟所、大真殿再興勸進の大方者、

勸進帳を聽聞し、勸めに入れや關守」と、軍勢の著到一卷取出し、味方の祈禱敵調伏と觀念し、高らかにこそ讀上けれ。「それ情々おもんみれば、韃靼の秋の月は、無殘の雲に隠れ、生死不定の永き夢、驚かすべき勢もなし。爰にそのかみ、帝おはします。御名お

ば立宗皇帝と名付奉り、寵愛の玉妃に別れ、戀慕やみがたく、涕泣眼にあらく、涙玉を買く、思ひを善路に翻して大真殿を建立す。簡程の靈場の、絶なん事を悲しみて、臨節の

褒似が末葉諸國を勸進す。一戦合戦の輩は、敵方にては首を矛に貫かれ、味方にては合戦勝利の勝時揚げん。歸命稽首敬て申と、天も響けと讀上たり」翁「關の大將右龍虎左

龍虎、「すは國性爺、飛で火に入夏の虫」吳「梢に蟬の喚いて懸れば翁」につこと笑ひ國樾

噲流は珍らしからず。門を破るは日本の朝比奈流を見よや」逆貫の木逆茂木押破り、向ふ

國性爺合戦

開吹き越ゆる一
旅人の秋涼しく
成にけり開吹越
ゆる須磨の浦風
(續古今集)

ヲ、一かけ壁と
負ふにかく

粟粟一義仲の俱
利伽羅峠にて平
家を追落す事
振落一馳越の逆
落

楚人の一炬一楚
人一炬可憐焦
土(阿房宮賦)

鶴のなき世なり
けり一鶴のなき
よなりけり神無

者を敲き伏せ、逃るを搦んで人礫、左龍虎右龍虎討取て、難なく過る月日の關や、碁盤の上も二人「開吹越ゆる秋の風、霧霽わたる山城は、韃靼の軍將海利王が楯籠り、前は巖壁後海、要害頼みの油断を見て、秋の夜討の國性爺、乗たる駒の轡虫、月松虫の聲澄渡り、しんくりにんくしづくくと、堀際近く攻寄て、百千の高提灯一度にばつと立たるは、

千世界の千日月一度に見るが如くにて、城の兵、寢耳に水の、あはて騒いで甲を脚當、鎧は逆ま馬を背中に、ヲ、くくくくくく、大手の門を押開き、切て出れば寄手の勢、

貝鉦鳴し時の聲、大將團扇追取て、ひらりくひらりくひらり 三重閃かし」吳「日本流の軍の下知、攻付挫ぐは義經流、緩めて討は楠流」二人「栗殻落し坂落し、八島の浦の浦波

も、爰に寄手の威勢強く、揉立々々 三重切立られ、城中指てぞ引たりける。「時分はよし」と夕暗に、日本祕密のほうろく火矢、打て放つ其響き、須彌も崩るよ計なり。楯も櫓も海士

の焚く、鹽の煙か炭竈か。火焰は秋の村紅葉、楚人の一炬に焦土となんぬ、咸陽宮共謂つべし。國性爺勝時の駒の手綱を搔繰て、輪乗をかけてくるくくく、くるりくと乗廻し、巡

る月日に偽りの無き世なりけり神無月、時雨て過る岡の邊に、棟門高き城廓こそ、是も國性爺が切取りし北州の長樂城。軒の藁は爛々と、玉を彩る初霰、雲交りの夕嵐、吹来る上

月誰が誠よりし
ぐれそめけん
(續後拾遺集)
付城―出城

鏡水―水鏡に映
して見よとなり

着見―情開いた
目
上十五―上弦
下十五―下弦
釣針―弦月に似
たれば云
弓の影―弓張月
といふより

に降積り、塀も櫓も埋れて、雪の眺は面白や」其外みん州けん州諸國の府、三十八ヶ所切取
て、太子の御幸を待顔に、所々に付城築き、兵糧軍兵、込置て、威勢は天の氣に顯れ、手に
取る様にぞ見えにける。吳三桂悦喜の餘り。身をも人をも打忘れ、太子を抱き奉り、城
有山へと走り行く。二人の老翁引留め、「愚なりく。目撃一瞬に見ゆるといへ共、各百里
を隔たり。汝此山に入て一時と思ふ共、五年の春秋を送り、四年に四季の合戦を見たると
はよも知らじ。斯いふ中にも立月日。太子の成長、汝が身の、面影を能く水鏡、水清けれ
ば影清し。汝忠有誠有、心の鏡に移り來る。我は先祖高皇帝、我は青田劉伯溫、三人住家
は月の中に立、桂の裏葉吹返し、劉智見の目には上十五、高下十五夜と見つれ共、劉衆
生は心亂れ碁の、石とや嘸な見るらん」高謠「又水中の遊魚は」劉釣針と疑へり」高謠「雲上
の飛鳥は」劉弓の影共驚けり」高謠「一輪も下らず」劉萬水逆も上らねば」二人満ては缺
る影あれば、缺ても満る月を見よ。暫しが程の雲隠れ、遂には晴て天照す、日の本和國の
神力にて、太子の位は早出る日」と、宣ふ御聲は松吹く嵐、佛計は松立山の、峯の嵐に吹
隠れてぞ失せ給ふ。茫然として吳三桂、夢かと思へばまどろまず。實も五年の月日を経た
る印にや、我顔には髭伸たり。太子の尊容時の間に、御背丈も立伸て、早七歳の御物ごし。

思ひにて一本
思ひにて

「吳三桂く」と召さるよ御聲おとなしく、雪の深山に鶯の、初音を聞し思ひにて、「あいあい」と頭を下、天を拜し地を拜し、嬉しさ足も定まらず、二度夢の心地せり。御前に手を束ね、吳古への鄭芝龍が一子國性爺、日本より渡つて、味方の義兵を起すとは音にこそ承れ。春秋五年の軍功明かに、大明半國は取返し候へば、國性爺に案内して、君是にまします旨を、告知せ度候」と、申も敢ぬに、遙の谷の向ふより、「なふく」それ成は、司馬將軍吳三桂にてはなきか。吳三桂く」と呼はる方を能々見て、吳御身は昔の鄭芝龍か」鄭是はく吳三桂、命あれば珍しや。一子國性爺が古郷の妻、梅檀皇女を御供せし」と招きあへば姫宮も、「懐しの吳三桂、お事が妻の柳歌君、命懸ての忠節にて、浮世を渡る浮れ舟、日本へ吹流され、一官親子夫婦の情、不思議に再び逢事よ。柳歌君は何國にぞ。綠兒は何と成けるぞ。早ふ逢たい逢せて給べ」と、焦れ給ふぞ道理成。吳されば其時の深手にて、我妻は空しく成、后も敵の鐵炮に、命を落し給ひしゆへ、胎内を斷破り、我子を害し敵を欺むき、太子は山中にて安々育て參らせし。はや七歳の生先は、是に渡らせ給ふぞ」と、語るにつけて姫宮も、「わつ」と計にどうど伏し、人日も別ぬ御歎き、思遣られて悼はしし。一官籠を見返つて、「あれく梅勒王奴が姫宮を見付、數

福壽海云々法
華經普門品に慈
眼視衆生福壽海
無量とあり
葛城の久米一役
小角神をして御
嶽と葛城山に岩
橋を造らせたる
故事、一言主神
形醜しとして夜
渡したり(水鏡)
必読―必定

千騎にて追駈る。年寄骨に力身を出し、踏留て命限り、防ぎ支へんとはやれ共、宮の御上危しく。それへ何卒退たいが、此山不案内、谷を越す道は有まいか」異いやく此山廻れば六十里。谷深ふて底知れず。是へも呼れず其處へも越されず。エ、如何せん何とかせん」と、虚空を拜し、「只今奇瑞を現じ給ふ、御先祖高祖皇帝、青田の劉伯温、神仙微妙の力を合せ、非常の危難を救ひ給へ」と、太子諸共一心不亂に祈誓有。姫宮小睦も手を合せ、妙「南無日本住吉大明神、福壽海無量」と丹精無二の心ざし、天も感應地も納受、洞口より一筋の雲無心にしてたな引ば、天の雲梯鵲の渡せる橋や、葛城の久米の岩橋夜るならで、夢路を辿る如くにて、渡る共なく行共なく、向ふの峰に登り付、足もわぢく慄ひけり。程なく賊兵雲霞の如くどつと駈寄せ、賊「あれく」太子吳三桂も見へたるは、思ひも寄らぬ拾ひ物。鱗網で鯨を取とは此事。的に成たる奴原、やれ弓よ鐵炮よ。打取れ射取れ」とひしめきける。梅勒王下知をなし、「やれ待てく、後は廣し退き場は有、弓鐵炮は叶ふまじ。こりや見よ遂に見ぬ雲梯、必読國性爺奴が日本流の算盤橋、疊橋なんといふ物ならん。敵に喰物あてがふは愚の軍法、續けや者共、渡れや渡れ」と五百余騎、押合詰合我先にと、ゑいく聲をかけ梯の、中渡ると見えけるが、山風谷風颯々

面額一貫つかふ
に同じ

葛藤一山芋に似
て大なり味煮
し、所にかく

四ツ目殺、中目
しちやう、せき
はま、劫一皆恭
の詞、はまは虜、
劫は功に密す

泰山を挟んで云
云一孟子にある
句にして泰山云

颯と、雲の梯吹切て、大將始め五百余騎、どたくくと落重なり、面額打割る、天窓を砕く。泣つ喚いて彌が上、谷をも埋む計なり。吳三桂鄭芝龍「得たりかしこし心地よし」と、大石大木當るを幸投かけく打つければ、一騎も残らず刹那が中、人の鮎とぞ成りにける。中にも大將梅勒王、岩根を傳ひ葛を手繰り這登れば、吳三桂遊仙の碁盤引提け、吳こりや此碁盤は、葛諸で練て石より堅く、苦ふて口に合す共一口喰ふか。己れが一目目を持って御無用の碁の相手、碁勢を見よ」と、頭を出せば丁ど打、面を出せばはたと打、打付く脳も鉢も打碎かれ、微塵に成てぞ失せにける。斯チ、く本望々々。本朝にても斯る例は、先例吉野の碁盤忠信、それは櫃の木是は葛諸の九仙山。先手が味方へ廻りくる、四ツ目殺に中手を入れて、しちやうに懸て打切て、攻手擲手斷切て、手詰のせきを勝軍、敵のはまを拾ひ上、國も御代も打かへで、手を盡したる劫も有。忠義の道は先つ斯うく、道は斯うよ」と打連れて、福州の城にぞ入にける。

第五

泰山を挟んで北海をこゆる事は能はず。王の王たらざるは、能はざるにはあらずとかや。

云は力能はざれ
どもの普通事は
出来得ると也

りうめが原一
本りうばが原

漂ふ一逃げ迷ふ
羽ふいて一羽音
を立てて

延平王國性爺、兵を用る事、掌にまはずが如く、五十余城を屠り、武威日々に熾にして、妻の女房古郷より、柗檀皇女を供し参らせ、九仙山より吳三桂、太子を御幸なし申せば、十善天子の印綬を捧げ、永曆皇帝と號し奉り、龍馬が原に八町四方の木城をからくみ、陣幕戸幕錦の幕、陣屋の上には日本伊勢兩宮の御祓、大祓を勸請し、太子を別殿に移し参らせ、其身は中央の床几にかより、司馬將軍吳三桂、散騎將軍甘輝、同じく左右の床几に座し、韃靼大明分目の勝負、軍評説、取々なり。吳三桂團扇取直し、一凡そ謀計は淺きに出て深きに至るに如はなし」と竹筒一本取出し、「此筒に蜜をこめて、山蜂多入置たり。斯の如く数千本拵、先手の雜兵に持せ、立合の軍する躰にて、筒を捨て逃退かば、貪慾熾んの韃靼勢、食物と心得拾取んは必説。口を抜と齊しく數萬の山蜂群り出、賊兵を毒痛せしめ、漂ふ處を取て返し、八方より討取べし。是御覽候へ」と、口を抜けば數多の蜂、鳴羽ふいてぞ出にける。吳賊兵嘲笑ひ、淺墓成童威しの謀計、燒捨て恥かよせよ、と積重ねて火を放けん。其時筒の底に仕懸たる、放火の藥鳴渡り、飛散て十町四方の軍兵に、生残る者は候まじ」と、火繩を筒に差つくと齊しく飛たる亂火の仕懸、實にも斯とぞ見えにける。五常軍甘輝、菓物入たる花折一合取出し、其吳三桂の奇

謀一謀の謀か

五臟一心、肝腎、
肺脾

計尤候。又某が諫、斯の如く折籠二三千合も拵様々の菓子餉酒肴したよめ、各
 是に鳩毒を入、陣屋に貯へ並べ置、陣所近く敵を引受け、戦ひ負たる躰にして、十里計
 引取るべし。韃靼が例の長追、勝誇て陣屋に込入、此食物に眼くれ、寶の山に入たりと
 軍將雜兵、我先にと搦み喰はんは必説、唇に觸ると齊しく、片端に毒血吐き、刃にち
 ぬらずして鑿しにしてくれん」と、面々軍慮心を碎き、評義取々區々なり。國性爺打領
 き、「孰れも一理有計略、批判申に及ず。去ながら、國性爺が魂に徹し忘れ難きは、母
 が最期の一句の詞。韃靼王は汝等が母の敵、妻の敵と思ひ込んで本望遂よ。氣を撻ませ
 ぬ其爲の自害成との詞の末、骨に泌み五臟に徹し、利那も忘るゝ事はなし。千變萬化の
 謀も何かせん。只無二無三に攻入て、韃靼王李蹈天に、押並べてむすと組、寸斷く
 に刻んで捨ずんば、假令國性爺が百千萬の軍功も、君の忠も世の仁義も、母の爲には不
 孝の罪」と、鏡の様成兩眼に、涙をはらくと流しければ、吳三桂甘輝を始め、一座の
 上下諸共に、皆々袖をぞ濡しける。國殊更女の身ながらも、古郷を忘れず生國を重んじ、
 最期迄日本の國の恥を思はれし。我も同じく日本の産、生國は捨まじ、と彼れ見給へ。
 天照太神を勸請す。某匹夫より出て數ヶ所の城を攻落し、今諸侯王と成て各の傳

卒し一牽し

旁一留々

に預る事、全日本の神力に依てなり。然れば竹林にて従へし島夷共、日本頭につくり置、彼等を眞先に立、日本の加勢と披露せば、元より日本弓矢に長じ、武道鍛錬かくれなく、韃靼夷聞怖して、二の足に成所を、疊よせて乗取らんと、此比我女房に謀合せたり。ヤアく源の牛若、軍兵卒し是へくと、團を上れば、「あつ」と應へて立出る、小睦が髪の初元結、諸軍勢の元服頭、大和淺黄に唐錦、華麗成ける出立なり。假御殿の幔幕より、姫宮走出給ひ、撫なふく國性爺、此篋は御身の父一官の篋印。此書付は一官の筆、心元なき文言」と出し給へば、床几を下つて讀上る。又我愁に明朝先帝の朝恩を報せんと、再び此土に歸參し、功もなく響もなし。老後の餘命幾許の樂をか期せん。今月今夜南京の城に向つて討死を遂げ、美名を和漢に留むる者なり。鄭芝龍老一官、行年七十三歳」と、讀も終らず國性爺、すつくと立ち、「サア敵に念が入て來た。母の敵に父の敵、智略も入らず軍法も何かせん。旁は兎も角も、身に逼るは國性爺只一人。南京の城に乘込、韃靼王李蹈天が首捻切、父が最期の場を換へず、討死して父母が冥途の旅を同道せん。今生のお暇請」と、飛で出れば兩將袖に絶つて、其ア、曲もなし。甘輝が爲には妻の敵舅の敵、吳三桂が爲にも妻の敵縁子の敵、國ヲ、それく孰れ

すゝどげー鋭き
に同じ

不興一敵の弱き
に興をさます

も敵に輕めなし。天下の敵は三人一所。サア來い」と駈出る。此三人の太刀先には、如何なる天魔疫神も、面を向くべき三重方もなし。鄭芝龍老一官、夕霧暗き黒革威、すよどけに出立て、南京城の外廓の大木戸敲いて、鄭國性爺が父老一官と申者、年寄膝骨弱つて人竝の軍叶はず。されば迎若殿原の軍咄し、安閑と聞ても居られず。此城門に推參して、速に討死し、素意を達し度候。あはれ李滔天出合、此白髮首を取て給べ。生前の情ならん」とぞ呼はりける。城の中より六尺豊の大男、「優しし一官、相手に成てとらせん」と、木戸押開き切て懸る。「心得たり」と二打三打討ぞと見へしが、突と入て首打落し、大きに不興し大音上、鄭一官年寄たれ共、斯様の業武者に遣る首持ず。李滔天出合れよ。外の者が出たらば何時迄も此通」と、城を睨んで立たりけり。韃靼大王壽陽門の櫓に顯はれ出、王國性爺が父老一官とは彼奴めよな。問ふべき子細數多有。殺さず共搦め取て引て來れ「承る」と四五十人棒すくめに取廻し、透をあらせず滅多打、捻伏せく縛り付、城中さして引て入。無念といふも餘り有。程なく甘輝吳三桂、國性爺を眞先に、大手の門に駈付れば、引續いて六萬余騎、小睦を後陣の大將にて、今日を死戦と押寄せたり。國性爺下知を爲し、「未だ生死も知れず、殊に此南京城、四方に十二の

大門、三十六の小門有。一方にても明たる方より落失せんは必説。四方に心を配つて討
 て」と、相詞に手を配り、箆を叩き時の聲、天も傾く計なり。小睦が嗜む劔術の、牛若流
 の小太刀を以て一陣に進み出、少相手選はず時選はず、所も選ばぬ此若武者、死たい者
 が相手ぞ」と、思ふさまに廣言し、多勢が中へ割て入、火水を飛せて三重戦ひける。賊
 兵數多討るれ共、七十萬騎楯籠つたる南京城、落へき様こそなかりけれ。國性爺は如何
 にもして、父の生死を知るべし。と駈廻つても詮方なく、陣頭に大音上、罵我唐土へ渡つ
 て五年の間、數ケ度の合戦終に無刀の軍をせず。今日珍しく劔の柄に手もかけまじ。馬
 上の達者劔術獲物の韃韃勢、寄て討てや」と招きかくれば、威憎い廣言打殺せ」と、我も
 我もと喚いて懸る。引寄て劔捻取、敲き挫ぎ打みしやぎ、鋒槍長刀もぎ取く、捻曲け押
 曲け折碎き、寄來る奴原脚に障れば踏殺し、手に觸るを捻殺しては絞殺しては人礫、騎馬の武
 者は馬共に、一ツに擲んで手玉に上、四足を擲んで馬礫、人礫、馬礫、石の礫も打交り、人間
 業とは三重見へざりし。さしもの韃韃貢寄られ、すは落城と見えたる所に、いつくわんたておも
 に縛付、韃韃王を先に立、李踏天進み出、李ヤアく國性爺己日本の小國より這出、唐
 土の地を踏荒し、數ケ所の城を切取、剩大王の御座近く、今日の狼藉總意千萬、是に

とくの返答！一
本とかくの返答

しどろ足―亂れ
足

よつて親一官を斯の如く召取たり。日本流に腹切か。但親子諸共直に日本へ歸るに於ては、一官を助べし。承引なくばたつた今、目前にて一官を引張切にせん。とくの返答早申せ」と高聲に呼はれば、今迄勇む國性爺、はつと計に眼も暗み、力も落て打萎れ、諸軍勢も氣を失ひ、陣中ひつそと静りける。一官齒嚙をなし、「ヤイ國性爺、狼狽たか後れたか。七十に余る此一官、命存へ何に成。母が最期の健氣なり迎、父にも語吹聴せしを忘れしか。是程迄仕課せし一大事、此黻爺が命一つに迷ふて、仕損せしと云れて、末代の恥辱古郷の聞え。日本生れは愛に溺れ義を知らぬ、と他國に惡名とどめんは日本の恥ならずや。女なれ共汝が母は生れ古郷を重んじ、日本の恥といふ字に命を捨て忘れしか。是程の手詰に成、此親が目前に八つ裂にせらるゝ共、目もふらず飛懸つて本望遂げ、大明の御代になさんと思ふ根性は何處で失ふた、エ、未練なり淺まし」と、地團太踏んで制すれば、國性爺父に恥しめられ、思切て大王目がけ、飛で出れば李踏天、父に劔を差當る。國はつ」と氣も消へ立留まり、進みかねたるしどろ足。頭の上に須彌山が、今崩れかよつてもびく共せぬ國性爺、前後に暮てぞ見えにける。甘輝吳三桂互に急度目配せ、突と出て韃靼王の前に頭を下け、「斯迄仕課せ候へ共、御運強き韃靼王、一官搦め捕

八逆―謀反、謀
 大逆、謀叛、惡慮、
 不道、大不敬、不
 孝、不義
 五逆―父殺し、
 母殺し、佛身上
 り血を出す、阿
 羅漢を殺す、和
 合の術を破る
 十惡―殺生、偷
 盜、邪淫、妄語、惡
 口、兩舌、綺語、貪
 慾、瞋恚、愚痴

らるゝ事、國性爺が運も是迄。末頼なき大將。我々兩人が命を助給はらば、國性爺が首
 取て差上ん。御誓言にて御返答承はらん」と、云もあへぬに韃靼王、「チ、く、神妙
 神妙」と云所を、飛懸てはつたと蹴倒し絞上れば、透をあらせず國性爺、飛懸て父が縛
 め捻切く、李滔天を取て押へ、父を縛し楯の面、まつ其如く高手小手に縛付、三人
 目と目を見合せて、「ア、嬉しや」と悦ぶ聲、國中響く計なり。諸軍勢勇みをなし、太子
 ひのみやみ、姫宮御幸なし奉れば、國御前にて彼奴原、則罪科に行ふべし。夷國とは云ながら、韃靼
 國の王なれば、縛りながら鞭打して本國へ送るべし」と、左右に分つて五百鞭、半死半生
 打すへて引退けたり。「サア是からが李滔天、元の起りの八逆五逆十惡人、片身恨のない
 様に、國性爺は首引抜かん。兩人は兩腕」と、三方に立かより、聲をかけて一時に、「忍
 いやうん」と引抜き捨、永曆皇帝御代萬歲、國安全と壽くも、大日本の君が代の、神
 徳武徳せい徳の、満て盡させぬ國繁昌、民繁昌の恵によつて、五穀豐饒に打續き、萬々
 年とぞ祝ひける。

